



Title	コミンテルンとバルカン民族問題 (I)
Author(s)	木戸, 麿; Kido, Shigeru
Citation	スラヴ研究, 21, 157-187
Issue Date	1976
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5064
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113033.pdf



コミンテルンとバルカン民族問題 (I)

木 戸 霧

1. はじめに
2. 十月革命前のポリシェヴィキと民族問題
3. コミンテルン創設期のバルカン社会主義運動
4. コミンテルンのバルカン民族政策の形成
5. コミンテルン第5回大会とバルカン民族問題 (以下次号)
6. 第5回大会以降のコミンテルンのバルカン民族政策
7. むすび

1. はじめに

近代における独立過程で、またその後の建国過程で鋭く表面化したバルカン諸国の民族問題は、ギリシヤをのぞくそれら諸国が第二次世界大戦後社会主義化したのちも根強く存続し、社会主義圏全体に新たな波紋を投げかけている¹⁾。ただ、第二次世界大戦後のそれは、この地域の伝統的なナショナリズムが蘇生したという面を持つと同時に、社会主義ないしは共産党の原理や動態と結びついて展開されてきているだけに、それまでとは違った複雑な様相を帯びたものになっている。

第二次世界大戦後のバルカン民族問題のこの二つの側面を統一して把握するためには、戦前のこの地域の共産主義運動と民族問題との関連を分析することが不可欠であると思われる。第二インターナショナルがナショナリズムの劫火に焼かれて崩壊したのち、その対立物としてプロレタリア国際主義を旗印に登場した共産主義インターナショナル (以下コミンテルン) が、ヴェルサイユ体制の民族問題にかんする矛盾を集中的に背負わされた東ヨーロッパ、ことにバルカン地域の政治的発展にどのように対応しようとしたのか。その対応の仕方がどのような経過をたどって変動し、それが現地の共産主義運動にどのような影響を与えたのか。そういう問題についての概説的な見通図を得ようというのが、本稿の意図するところである²⁾。

もとより、以上のような問題を全体として解明するためには、一方において、コミンテ

1) 現在のバルカン民族問題としては、たとえば、クロアチアの分離主義傾向をはじめとするユーゴスラヴィア内部の民族対立、マケドニア問題をめぐるユーゴスラヴィアとブルガリアの論戦、コソヴォ自治州をめぐるユーゴスラヴィアとアルバニアの、また南アルバニア地方をめぐるギリシヤとアルバニアの潜在的な不和、旧ベッサラビア地方にたいする表面化しないが根強いルーマニアの対ソ要求、ルーマニアのトランシルヴァニア地方の歴史にかんするルーマニア、ハンガリー間の論争と同地方のハンガリー人の現状をめぐる両国民間にわたる確執、などがあげられる (部分的には、『国際年報』日本国際問題研究所刊、の各巻に掲載された東欧諸国にかんする稿者による紹介を参照)。

2) 本稿のテーマにかんする問題点を的確、簡潔に指摘したわが国における先駆的業績として、百瀬宏「ヴェルサイユ体制とヨーロッパ『諸小国』—東欧とその国際環境を中心に—」岩波講座『世界歴史』26 (現代3), 204-247 ページ (ことに239-240 ページ), がある。

ルンの指導部の構成や政策体系の変化、さらにはそれを促した論争を克明に追跡することが必要であり、他方ではこの時期のバルカン諸国内外の政治的、社会的諸条件と共産主義運動との関係を考察することが不可欠であろう。そうした作業は、ともに稿者の現在の能力をはるかに越えたものである。その意味で本稿は、主として1920年代前半のコミンテルンのバルカン民族問題政策という限定されたテーマにかんして、問題の所在を指摘する研究ノートの作業にとどまるものである。そうした限定されたテーマについても、バルカン現地研究者が歎いているように³⁾、史料がきわめて限られているうえに、コミンテルンが公表した資料についてさえ、それを総合的に渉猟するゆとりがなかったために、本稿の視野はそれだけ狭いものになり、また裏付けも不十分なものとなった。

しかし、バルカン諸国においても、当時のコミンテルンの方針にたいする批判が現われ始めており、それが前述の注記において指摘したような現実の民族問題と絡み合っ、将来重要な歴史学上の脚光を浴びることが予想されるだけに、本稿のようなごく部分的な問題点の紹介も、今後のわが国のバルカン研究にとってある種の刺激となりうるかもしれない。本文において詳論するように、1924年6—7月のコミンテルン第5回大会前後に、そのバルカン民族問題にかんする政策が明瞭なものになると同時に、それ以降、バルカン諸国における多民族国家の解体や少数民族地域の政治的分離が、現実の政治方針としてコミンテルンの側から打ち出され、実際の共産主義運動に機能障害を引き起こした。

最近になって行われるようになったバルカン諸国におけるコミンテルン批判の例をいくつか挙げれば、たとえば、1963年に刊行されたユーゴスラヴィアの共産党史は、同党創設期に党がユーゴスラヴィアを単一民族国家であると規定したのは、大セルビア主義による民族的抑圧の存在を無視する政治的誤りであった、とするが、同時に、南スラヴ国家の創設そのものは「歴史的進歩」であった、という。そして、コミンテルンはその点を認めず、ユーゴスラヴィアからのクロアチア、スロヴェニア、マケドニアの分離を要求し、さらに「現実を無視して、ユーゴスラヴィアはたんなる西[・]欧[・]帝[・]国[・]主[・]義[・]の[・]創[・]作[・]物[・]（傍点は原文イタリック、以下同じ）にすぎず、解体されなければならないと主張した。それは、ユーゴスラヴィアが南スラヴ諸国民の民族解放への熱望と闘争の産物であり、諸国民の単一国家への統合は、労働者階級と他の進歩的勢力を社会主義をめざす闘争においてより広い舞台で組織することを可能にした、という点を考慮しようとしなかった。その点でコミンテルンの態度は誤っていた」と述べている⁴⁾。また、ルーマニア共産党のチャウシェスク(Nicolae Ceaușescu)書記長は、1966年5月の党創立45周年記念式典の演説において、「ハプスブルク帝国の没落とロシア革命は、ルーマニア国民の民族解放闘争と統一国家形成の可能性を開いた。……党第3、4、5回大会で、ルーマニアは外国領土の占領から生まれた多民族国家であり、被抑圧少数民族に分離の権利を認めるとしたのは、統一国家とし

3) ユーゴスラヴィアのある研究者は、コミンテルンと同国の共産党の関係について、史料が決定的に不足しており、ことにソ連側が、それを一部しか公表していないことが、全体的な研究をきわめて困難にしていると指摘している [Momčilo Zečević “Socijalistička Radnička Partija Jugoslavije (Komunista) i III Internacionala,” *Историјски гласник* (Орган друштва историчара СР Србије: Београд), 4. 1963, стр. 3-4.]。

4) Родољуб Чолаковић, Драгослав Јанковић и Перо Морача, ред., *Преглед историје Савеза Комуниста Југославије*, Београд, 1963, стр. 48, 126.

てのルーマニアの解体をもたらすものであり、根本的な誤りであった。……コミンテルンは、わが国の具体的条件を無視した戦術指導と指令を与えた⁵⁾」と述べた。それ以降、つぎのようなごく一般的な形のコミンテルン批判がルーマニアにおける歴史研究文献のなかに散見されるようになった。「ルーマニア人民の歴史や経済的、社会的発展を深く分析することもなく、外部で採択された命題に機械的に順応し、コミンテルンの方針に従ったため、党の指導部には、全人民を独立と国家主権の擁護に、また祖国の領土的一体性のために動員する党活動を困難にさせるような欠陥や誤謬が存在した。しかし、党員たちの日常活動においては、このような評価は受け入れられなかった⁶⁾」。このようなコミンテルン批判は、現実の政治的反響が大きいために当座はバルカン諸国で大きな発展を示すとは思えない⁷⁾が、すくなくとも歴史研究の分野で長期的にはしだいに確立したものになっていくと考えられる。その動向をより精密に追跡し、紹介していくことも、稿者の将来の課題の一つである。

なお、本稿で取り上げる「バルカン諸国」とは、主として現在のユーゴスラヴィア、ブルガリア、ルーマニア、ギリシアである。アルバニアが除かれるのは、本稿が重点をおく1920年代にはその国に共産主義運動がほとんど存在しなかったからであり、またトルコは、その主要部分がバルカン半島以外に存在すること、コミンテルンでも多くの場合「バルカン」ではなく「東方諸民族」の一部として扱われたことなどの理由で、対象から除外した。ルーマニアは地理学上はバルカン半島に属さないが、歴史的、政治的課題をバルカン諸国と大きく共有しており、コミンテルンでも一貫して「バルカン」の一部として扱われているため、本稿でもそれに含めて取り扱うこととした。

2. 十月革命前のポリシェヴィキと民族問題

コミンテルンのバルカン民族問題にかんする対応を見るためには、なによりもまず、革命前のロシアのポリシェヴィキ、ことにレーニンの民族問題にたいする態度を分析することが当然の前提となるであろう。民族問題や民族自決権にかんするレーニンの評価は、時期と対象に応じてきわめて多彩であり、それを正確に整理するにはかなり詳細な研究が必要とされる⁸⁾。しかしここではそのゆとりはないので、ごく一般的に、彼が被抑圧民族の

5) Nicolae Ceaușescu, *The Romanian Communist Party-Continuer of the Romanian People's Revolutionary and Democratic Struggle of the Traditions of the Working-Class and Socialist Movement in Romania*, Bucharest, 1966, pp. 25, 36-37.

6) C. Ilie "Lupta întregului popor entru apărarea independenței naționale a patriei în concepția Partidului Comunistă Român (1921-1940)" *Anale de istorie*, XVIII 2 (1972), No. 2, N. 29.

7) たとえばルーマニアの場合、つぎのような指摘がある。「N. チャウシェスクの1960年代のいくつかの演説は、コミンテルン批判との関連でルーマニア共産党史の改正が行われることを予想させた。しかしそれ以降、この問題にかんする討議は行われず、また非合法時代のルーマニア共産党にたいするコミンテルンの影響にかんするいかなる研究も計画されていないのであり、この沈黙はその領域でも非常な慎重さが、見受けられることを思わせるものである」(Lilly Marcou "La République socialiste de Roumanie: l'Évolution de la recherche historique et idéologique," *Revue française de science politique*, Vol. XXIII, Nr. 3. juin 1973, p. 607).

8) それについては、つぎの研究が参考になる。Horace B. Davis, *Nationalism & Socialism: Marxist and Labor Theories of Nationalism to 1917*, New York, 1967 (藤野渉訳, 岩波書店, 1969年), chap. 8.

解放や民族の同権を強く支持したこと、とくにバルカン諸民族については、「歴史なき民族」という発言に示されるように歴史的発展段階の尺度から一般に低い評価しか示さなかったマルクス、エンゲルスとは違って、「自立した民族国家の創設」に積極的な意義づけをした⁹⁾こと、他方、それと同時に、民族自決を一般原理として主張したのではなく、歴史的、具体的な問題設定を求め、「あらゆる民族的要求、あらゆる民族的分離を、労働者の階級闘争の視点から評価する¹⁰⁾」としたことを指摘しておきたい。

ただ、いくらか補足をするならば、レーニンの民族問題にたいする態度は、きわめて大づかみにいって、当時の中・西欧マルクス主義者と比較すれば、政治的分離を含む民族自決権というテーゼをより前面に打ち出したものであったが、しかし彼の死後コミンテルンが採用する立場との比較でいえば、階級的観点をより鮮明に示したものであり、また民族自決権の主張を、被抑圧民族の「分離」「細分化」要求を支持する観点からではなく、もっぱら抑圧する民族の側の社会民主主義者の他民族抑圧に反対する義務の一環として掲げるものであったといえよう。本稿のテーマに関連する範囲であえて部分的な引用を行えば、彼は、「諸民族を抑圧民族と被抑圧民族に分け」たうえで、「抑圧民族の社会民主主義者は、……被抑圧民族の分離の自由を要求しなければならない」（傍点は原文イタリック、以下同じ）としたのであり、「他方、被抑圧民族の社会民主主義者は、被抑圧民族の労働者と抑圧民族の労働者との統一と融合をもっとも重要視しなければならない。なぜなら、そうしなければ、これらの社会民主主義者は、心ならずも、あれこれの国のブルジョアジー——彼らはつねに人民と民主主義の利益を売り渡し、つねにみずから併合と他民族の抑圧を辞さない——の同盟者となるからである¹¹⁾」と主張したのである。この点を彼はなんども強調しており、また別の機会に、「全ロシアのマルクス主義者、まず第一に大ロシア人マルクス主義者が、諸民族の分離権を承認するからといって、それはけっして個々の被抑圧民族のマルクス主義者の分離に反対する煽動を許さないことにはならない。それはちょうど、離婚の権利を承認するからといって、個々の場合に離婚に反対する煽動を許さないことにはならないと同様に、わかりきったことである¹²⁾」ともいっている。彼は一般に、民族的区分にしたがった諸国の細分化ではなく、「経済的發展にいっそう適した巨大な国家と諸国家同盟¹³⁾」を強く支持し、その前提条件として諸民族の自発的な結合を求めたのである。「われわれは自決権、すなわち独立、すなわち分離の自由を被抑圧民族のために要求するが、それは、われわれが経済的な細分状態あるいは小国家の理想を夢みるからではなく、反対に、われわれが大国家を望み、諸民族の接近とさらには融合を、ただし分離の自由をぬきにしては考えられない真に民主主義的な、真に国際主義的な基盤での融

9) Ленин, “О праве наций на самоопределение” (1914 г.), *Полное собрание сочинений*, Москва, 1969 г., Т. 25, стр. 261-263 (『レーニン全集』大月書店, 1957年, 第20巻, 424-425ページ)。 (以下, 巻数, ページ数のみ示す。引用は文章, 表記を一部修正し邦訳を使用する。)

10) *Там же*, стр. 274-275 (同上, 439ページ)。

11) “Революционный пролетариат и право наций на самоопределение” (1915 г.), Т. 27, стр. 63-64 (第21巻, 422ページ)。

12) “Социализм и война” (1915 г.), Т. 26, стр. 328 (第21巻, 324ページ); “О праве наций на самоопределение,” Т. 25, стр. 318 (第20巻, 486-487ページ)。

13) “Социализм и война” Т. 26, стр. 328 (第21巻, 324ページ)。

合を、望むからである¹⁴⁾」。

その後のコミンテルンの民族政策の推移との関係で同様に興味深いのは、革命前のスターリンの民族自決権にかんする主張である。1913年に「マルクス主義と民族問題」という論文のなかで、彼は、民族にかんする定義を行ったのち、「本質においては、民族闘争はつねにブルジョア的民族闘争であって、主としてブルジョアジーに有利で、都合のいいものである¹⁵⁾」と述べ、さらに以下のような論理を展開する。社会民主党は民族抑圧政策とは闘い、民族自決権を支持するが、それは信教の自由についての態度と同じであり、「社会民主党は、カトリック教や新教にたいする迫害にたいしてつねに抗議するであろう。……だが、それと同時に、社会民主党は、プロレタリアートの正しく理解された利益から出発して、カトリック教にも、新教にも、正教にも反対する煽動をおこない、社会主義的世界観に勝利をあたえようとするであろう。……自決についてもおなじことを言わなければならない。民族は自分の希望どおりにやっていく権利をもち、自分のどんな民族的制度(有害なものも、有益なものも)をも維持する権利をもつ。だれも一つの民族の生活に強制的に干渉することはできない(だれにもその権利はない!)。だが、このことは、社会民主党は民族の有害な制度や民族の不合理な要求と闘わず、これに反対する煽動をおこなわないであろう、ということの意味するものではない¹⁶⁾」。民族自決要求は、抑圧に抵抗する権利として意味をもつものであり、それ自体が社会民主党の積極的な綱領とはならない。民族問題の解決は、それ自体としてではなく、「国内の完全な民主主義化」を通してのみ実現される。ロシアにおいて民族抑圧を生んできたものは、その「粗暴な、アジア的な、社会的・政治的秩序」であり、それにたいしてスイスでは、「高度の民主主義のおかげで、諸民族は、少数民族であれ多数民族であれ、いずれも自由にくらしている」。民族問題の解決の可能性は、同一地域内での民族間の同化の可能性が生まれていることを考えれば、「民族的自治制」ではなく、「地方的自治制」によって与えられる。そのさい「少数民族が多数民族に圧迫される恐れはある。だが、この心配は、国が依然として旧制度のもとにあるばあいにしか、根拠がない。国に完全な民主主義をあたえよ、——そうすれば、この心配はあらゆる根拠を失うであろう¹⁷⁾」。

以上の部分的引用からも明らかなように、革命前のレーニンにあっては、民族自決権の主張は、けっして普遍的な社会主義的原理ではなく、諸民族の接近と融合のための前提として、はじめて意味をもつものである。当時はスターリンも、やや単純化された形ではあるが、同じような見方をしていたと思われる。そういう観点からすれば、民族原理にもとづくバルカン地域の細分化と分断状態を拡大することではなく、構成民族の同権を基礎にした連邦を通じて、「真に民主主義的な、真に国際主義的な基盤での融合を図ること」が、当時の社会民主主義運動の課題とみなされていたと考えられる。バルカンにかんしては、レーニンはたとえばつぎのようにいう。「バルカンにおけるスラヴ人農民の真の自由

14) “Революционный пролетариат и право наций на самоопределение,” Т. 26, стр. 68 (第21巻, 426-427 ページ).

15) 『スターリン全集』第2巻, 大月書店, 1952年, 342 ページ。

16) 同上, 392-393 ページ。

17) 同上, 345, 397, 373-374, 399-400 ページ。

も、トルコ人農民のそれも、それぞれの国の内部における完全な自由と、完全に徹底的に民主主義的な諸国家の連邦とによってのみ、これを保障することができるのである¹⁸⁾。「バルカン諸民族の完全な自由と独立だけが、バルカン連邦共和国だけが、現在の危機からの最良の出口を保証し、例外なくすべての民族にたいして完全な同権と無条件の政治的自決権を承認することによって、民族問題の真の解決を保証することができる¹⁹⁾」。バルカン民族問題にかんするこのような姿勢は、当時のバルカンの社会民主主義左派の立場と一致し、またそれを反映するものであった。

3. コミンテルン創設期のバルカン社会主義運動

コミンテルン創設以前のバルカン社会主義運動は、その多くが第一次世界大戦の過程で分裂し、路線全体が流動的な状態から抜け出していなかったが、その左派は伝統的なバルカン民族主義にたいする強い反発を多かれ少なかれ出発点としており、またロシア革命前後の革命の国際的な拡大への期待と関連して、社会主義的なバルカン連邦の結成を、たんなる宣伝スローガンではなく、当面の課題として掲げていた。すなわち、「バルカン連邦共和国」の創設を通じて過去の忌わしい民族対立を根本的に解決するという方式が、左派社会主義者の共通の目標になっていたのである。ことにセルビア、ブルガリアを中心とする南スラヴ地域では、社会民主党や左翼農民政党的の勢力が強かったこともあって、バルカン連邦共和国は現実的な可能性を持っていたといえよう。

まず南スラヴ人²⁰⁾の地域の社会主義者の動向について概観する。ハプスブルク帝国の崩壊にともない、1918年12月1日に「セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国」(1929年にユーゴスラヴィア王国と改称、以下便宜上それ以前もユーゴスラヴィアと呼ぶ)の樹立が宣言されたが、社会主義者は地域や政治的傾向に応じた複雑な相互対立をはらみながら、南スラヴ人の統一国家創設そのものには好意的な態度を示した²¹⁾。セルビア社会民主党は、第一次世界大戦にあたり反戦主義の立場を貫いた数少ない社会主義政党の一つであり、バルカンの民族対立にも強く反対し、後述するバルカン連邦運動の中心的担い手として活動してきたが、1918年に入り、南スラヴ人国家創設が日程にのぼると、それをバルカン統一への第一歩として高く評価した。同年12月29日の党機関紙は、「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人は同一の言語と同一の種族的性格を持っており、したがって単一民族である。彼らは自らを単一民族だとみなし、統一を望んでいる。彼らが一つの民族国家に統一されることは、それゆえ、議論の余地なく偉大な政治的、経済的、文化的必要事である。民族的統一ののちには、ブルジョアジーがその階級的エゴイズムを隠して、プロレタリアートの一部をナショナリズムに引き込むことはもはや不可能となるであ

18) “Позорная резолюция” (1912), Т. 22, стр. 151-152 (第18巻, 378ページ).

19) “К вопросу о рабочих депутатах в думе и их декларации” (1912), Т. 22, стр. 202-203 (第18巻, 450ページ).

20) 一般に「南スラヴ人」にはブルガリア人が含まれるが、本稿で南スラヴ人という場合は便宜上それを除くことにする。

21) このテーマにかんする優れた邦文文献に、柴宜弘「南スラヴ人統一国家形成をめぐって—ユーゴスラヴィア, 1917~1921—」『歴史学研究』No. 403 (1973. 12.); 同「南スラヴ人統一国家形成と社会主義運動—ユーゴ共産党創設期の民族政策を中心に—」同上, No. 409 (1974. 6.)がある。

ろう」と述べている²²⁾。他方、ハプスブルク帝国のもとにあった南スラヴ人社会主義者は、クロアチア・スラヴォニア社会民主党、ユーゴスラヴィア社会民主党（スロヴェニア）、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ社会民主党などに分かれていたが、たとえば1918年5月1日のクロアチア・スラヴォニア社会民主党宣言が「スロヴェニア人、クロアチア人、セルビア人は単一の同じ国民であり、単一国民のあらゆる属性を共有している結果…一つの独立した自由な国家を構成するのである²³⁾」と述べているように、民族問題については同じような単一民族論の立場に立っていた。彼らを分裂させたのは、統一国家問題や民族問題ではなく、ベオグラードに設立された中央政府と協力するかどうかをめぐる対立であった。1918年5月にモスクワにおいて結成されたロシア共産党（ボ）南スラヴ人共産主義グループの影響も波及し、全南スラヴ人地域の社会民主主義組織の統一をめざす気運が生まれ、1919年4月20日—23日に中央政府との協力を拒否する南スラヴ人地域のすべての社会民主党の代表がベオグラードに参集し、ユーゴスラヴィア社会主義労働党（共産主義者）を結成した。クロアチアとスロヴェニアの党ではハプスブルク時代の名残りで右派が指導部を握っており、前者からは分派が統一大会に出席、後者からは参加者がなかった。大会はいくつかの決議を採択したが、「ユーゴスラヴィア全土の自由選挙」を要求するという言葉にもみられるように、新生南スラヴ人国家を単一の政治単位として扱っており、そこに民族問題をめぐる矛盾が存在するとはみなしていなかった²⁴⁾。

この新党結成の1カ月あまりまえ、1919年3月2日—6日にコミンテルンの結成大会がモスクワで開催された。大会への招聘状が遅れて届いたため、セルビア社会民主党は代表を送れず、「心からの誠意をこめた挨拶²⁵⁾」を大会あてに送った。コミンテルン第1回大会には、バルカンから後述するバルカン社会主義連邦²⁶⁾の代表としてラコフスキー（Christian Rakovsky, Христо Раковски）が63票中3票の投票権を持って参加したほか、投票権のない代表として、ブルガリア人共産主義者グループからジョーロフ（Джоров）という名の人物が、またユーゴスラヴィアからは当時モスクワにいたミルキチ（Ilija Milkić）が参加した。当初、大会の組織委員会は、南スラヴ人地域から「南スラヴォニア・グループ」と「ユーゴスラヴ・グループ」の2つの組織代表が参加したと発表した。前者のグループは存在しないとミルキチが主張したため、最終リストには後者のみが載せられた。しかしミルキチにしても、1910年の第二インターナショナルのコペンハーゲン大会に出席

22) Ivan Avakumović, *History of the Communist Party of Yugoslavia*, Vol. 1, Aberdeen (U. K.), 1964, pp. 46-47.

23) Paul Shoup, *Communism and the Yugoslav National Question*, New York & London, 1968, p. 15 n.

24) 大会の模様については、Zečević, *gore navedeno*, str. 12-13; *The Communist International*, Series I, No. 13 (Aug. 1920), p. 116（稿者が利用しえたこのコミンテルン執行委員会機関誌は、1968年にニューヨークのGreenwood Reprint Corporationから編集刊行されたリプリント版である。原版は、Series Iはベトログラード、Series IIはロンドンで発行された英文版であるが、英文版が不完全ないし欠落している号については独文版が入っており、その場合は引用も *Die Kommunistische Internationale* として示す）。

25) 挨拶文は、*The Communist International*, Ser. I, No. 1 (1919), pp. 44-45.

26) 当時のコミンテルン文書では、「バルカン革命的社会民主同盟」「バルカン連邦」「革命的バルカン連邦」など、多様な呼称が使われている。

したのち、フランス、スイス等を経てモスクワに行っていたのであり、セルビア社会民主党は彼がコミンテルン大会に出席していることは知らず、大会終了後それを事後承認したのである²⁷⁾。大会ではラコフスキーが、ミルキチとともにコペンハーゲン大会に出たカツレロヴィチ (Triša Kaclerović) とポポヴィチ (Dušan Popović) の大セルビア主義的発言を引用して、セルビア社会民主党が社会愛国主義の立場に移行したと批判したのにたいし、ミルキチは強く反論し、カツレロヴィチらは党を代表していたのではなく、党は彼らを非難する態度をとっており、一貫して革命的伝統に忠実であった、と力説した²⁸⁾。これらの経過は、ソ連やコミンテルン指導部が南スラヴ人地域の運動と接触がなく、事態をほとんど把握していなかったことを示している。

ところで、ユーゴスラヴィア社会主義労働者党 (共産主義者) は、前述した同年4月の結党大会において全会一致でコミンテルンへの加盟を決議した。この党は、トパロヴィチ (Živko Topalović), ラプチェヴィチ (Dragiša Lapčević) らを中心とする「中央派」(centrumaši) と呼ばれる右派と、フィリポヴィチ (Filipo Filipović), マルコヴィチ (Sima Marković) らの革命派に分裂し、1920年6月にクロアチアのヴコヴァールで開かれた第2回大会で対立はその極に達した。この大会は統一大会と呼ばれ、党名を正式にユーゴスラヴィア共産党と改称したのであるが、「中央派」は中央委員選挙をボイコットし、12月には離党して翌年3月に新党を結成、6月には社会民主党と合体してユーゴスラヴィア社会党を結成することになる。しかしこの対立は主として革命情勢の切迫度の評価にかかわるものであり、民族問題についてはなかった。第2回大会で採択された長文の決議のなかでも、民族問題は取り上げておらず、わずかに、少数民族に関連して、「ユーゴスラヴィア共産党は、これまで同様に民族的統一と国内の全民族の同権の思想を強く擁護するものである。それは、南スラヴ人国家に属する他民族の政治的権利と市民権の侵害を全力をあげて阻止する²⁹⁾」と述べているだけである。他方、南スラヴ諸民族の関係については、「各地域の可能なかぎりもっとも広範な自治」を主張するのみで、単一民族論の立場にはいささかも変化がみられなかった³⁰⁾。この点は、のちにつきのように批判される。「同様に、会議は民族問題にたいする完全な無理解を示した。民族問題は、最初から民族的抑圧の基盤のうえに礎かれていた南スラヴの多民族国家におけるプロレタリア革命のもっとも基本的な課題のひとつであった。民族問題にたいする社会民主主義的見解にとらわれていたので、統一大会の改良派も革命派も、ともに南スラヴの被抑圧諸民族を労働者階級の真の強力な同盟者とは見なかった。それと反対に、統一大会で形成された単一民族および単一の民族国家という態度が、労働者階級を被抑圧民族の大衆運動から孤立させる結果をもたらした³¹⁾」。ただ、当時の南スラヴの共産主義者の態度には、全体として、それまでのマルクス主義の伝統的な立場、すなわちナショナリズムをブルジョアジーの運動とみ

27) Zečević, *gore navedeno*, str. 8–10, 12.

28) *Isto*, str. 10–11; *The Communist International*, Ser. I. No. 4 (Aug. 1919), pp. 122–123.

29) *Die Kommunistische Internationale*, No. 15 (1921), S. 383.

30) 同大会の様子は、*Ebenda*, No. 14 (1921), SS. 216–219; Avakumović, *op. cit.*, pp. 38–41, 47; *Преглед историје СКЈ*, стр. 65–69.

31) *Преглед историје СКЈ*, стр. 48.

なし、民族抑圧には反対するが同時に分断化ではなく「より大きな国民的単位」をめざすという立場が反映していた点を見落としてはならない。1918年にモスクワで結成されたフィリポヴィチらのロシア共産党(ボ)南スラヴ人共産主義グループが、「国家の分裂状態を克服し、単一の南スラヴ社会主義ソヴェト共和国を創設する」との目標を掲げていた³²⁾ことをみても、また1920年8月のコミンテルン機関誌が「ユーゴスラヴィアにおける労働運動」というペオグラード発の報告を載せ、民族問題をブルジョア各派の内紛としてとらえている³³⁾ことをみても、こうした態度は当時のソ連やコミンテルンの指導者によって承認されていたと思われる。

いずれにせよ、ユーゴスラヴィア共産党は、1920年11月の制憲議会選挙においては、全国から20万票近い得票と59の議席を得て第三党に躍進したのであるが、同年暮に政府はボスニア鉾山における反乱を口実に労働運動と党活動を弾圧し、翌21年8月には共産党を非合法化するのである。

つぎに、ブルガリアにおける動向についてみれば、中央同盟側への参戦と敗戦の結果、極度の経済的疲弊と政治的動揺にさらされたこの国では、反戦主義の立場を貫いた急進派の勢力が戦後急激に伸長した。その一つであるスタンボリースキ(Александър Стамболийски)に指導された農民同盟は、1919年8月の総選挙で第一党となり、10月にはスタンボリースキ内閣が成立した。もう一つの反戦主義勢力は、ブルガリア社会民主党の「狭義派」(テスニャーキ³⁴⁾)であり、大戦中愛国主義の立場をとり政府と協力した「広義派」の勢力が敗戦とともに凋落したのに較べて、その権威を急に増大させた。1915年5月25日—27日の第22回党大会でブルガリア共産党と改称し、コミンテルンに加盟したこの党は、8月の総選挙では有効投票全体の4分の1を得て第二党に成長した。

スタンボリースキの農民同盟は、イデオロギー面ではナロードニキの影響を受けた急進的農本主義の立場をとっていたが、対外的には、「農民同盟は、ブルガリアとその近隣諸国との永続的かつ平和的な関係を支持する。……それは、連邦の基礎のうえでブルガリアを他のバルカン諸国と統合することにより、この緊密な関係を強化しようと志向するものである³⁵⁾」と述べ、バルカン連邦を結成することにより民族対立を克服するという目標を掲げていた。他方、ブルガリア共産党も「狭義派」を名乗っていた戦争中から、近隣民族との友好を主張し、「バルカン連邦共和国」の結成による民族問題の解決を要求していた。1919年5月の第1回共産党大会で採択された党綱領は、「ブルガリア社会主義ソヴェト共和国は、ヨーロッパおよび世界社会主義連邦ソヴェト共和国の一部を構成するバルカン社会主義連邦ソヴェト共和国を創設するために、近隣国民と友好同盟を結ぶ³⁶⁾」という構想を示し、また大会で行われた決議は、「自らの運命を自由に決定するブルガリア国民の権利は、勤労大衆のブルジョアジーおよび帝国主義にたいする勝利によってのみ達成されるこ

32) Shoup, *op. cit.*, p. 20.

33) *The Communist International*, Ser. I, No. 13 (Aug. 1920), p. 116.

34) この組織は、1903年に「広義派」の社会民主党とは別組織となり、正式には労働者社会民主党と名乗っていた。

35) L. S. Stavrianos, *The Balkans since 1453*, New York, 1958, p. 648.

36) *The Communist International*, Ser. I, No. 1 (1919), p. 76.

とを、党は強調する。バルカン諸国民が真の独立にもとづいた国民的統一を達成しうるのは、バルカン連邦社会主義ソヴェト共和国（それにはマケドニア、ドブルジア等のソヴェト共和国が参加するであろう）の枠内においてのみであることを、党は宣言する³⁷⁾と主張した。スタンボリースキ政府は、1919年12月に共産党が組織した鉄道ゼネストを、連合国の援助を得て鎮圧し、他方共産党も当初から同政府にたいし強い敵意を示し、1920年3月の総選挙³⁸⁾のあとの一時的な和解の時期をはさんで、1923年のスタンボリースキ政権崩壊にいたるまで、両者は激しい敵対関係にあった。しかし、バルカンの民族問題にたいする態度についていえば、この二大勢力には共通した姿勢がみられた。

第二次バルカン戦争と第一次世界大戦の敗戦国ブルガリアは、多くのブルガリア人居住地区（マケドニア、トラキア、南ドブルジア）を近隣諸国に奪われ、その政治的雰囲気は民族的屈辱感情と領土回復要求に動かされやすかった。ことに深刻なのはマケドニア問題であった。マケドニアでは「内部マケドニア革命委員会」(IMRO³⁹⁾)という民族主義組織がトルコ支配時代から武力解放闘争を行っていたが、この組織は世紀の変わり目ころからしだいに暗殺と暴力のみに依存するテロリスト組織となり、また大戦中ブルガリアがマケドニアの大部分を占領したさいに同地方の管理を委ねられ、それ以降自立したマケドニア人の革命組織ではなく、ブルガリア政府と右翼勢力の道具になった。敗戦とともにブルガリア人からもマケドニア人⁴⁰⁾からも見離された IMRO は、イタリアからの援助を得てユーゴスラヴィア領とギリシア領のマケドニアでテロや襲撃を繰り返し、ブルガリアの右翼の領土回復要求の尖兵の役割を演じた。スタンボリースキはパリ講和会議で、マケドニアを一つの構成単位とする南スラヴ連邦を提案するとともに、他方でユーゴスラヴィアとの協力、IMRO にたいする強い規制の政策を進めた。ブルガリア共産党も IMRO の行動を非難し、前述したように、マケドニア、トラキアを含むバルカン連邦の創設を主張した。そのさい、1923年以降同党が打ち出した立場との違いは、現体制下でのマケドニア、トラキアの自治要求を前面に出すのではなく、第一にそれがバルカン連邦の枠内でのみ解決されること、第二にそれを実現するのはプロレタリア革命だけであること、を主張し、バルカン全体の革命闘争を民族要求に優先させていたことである。こうした態度は、1920年5月の第2回党大会にも引継がれる⁴¹⁾が、そのころから、後述するように重点の置き方に變化がみられるようになる。

ルーマニアは、第一次世界大戦によるロシア帝国、オーストリア・ハンガリー帝国の崩

37) *Ibid.*, Ser. I, No. 5 (1919), p. 54.

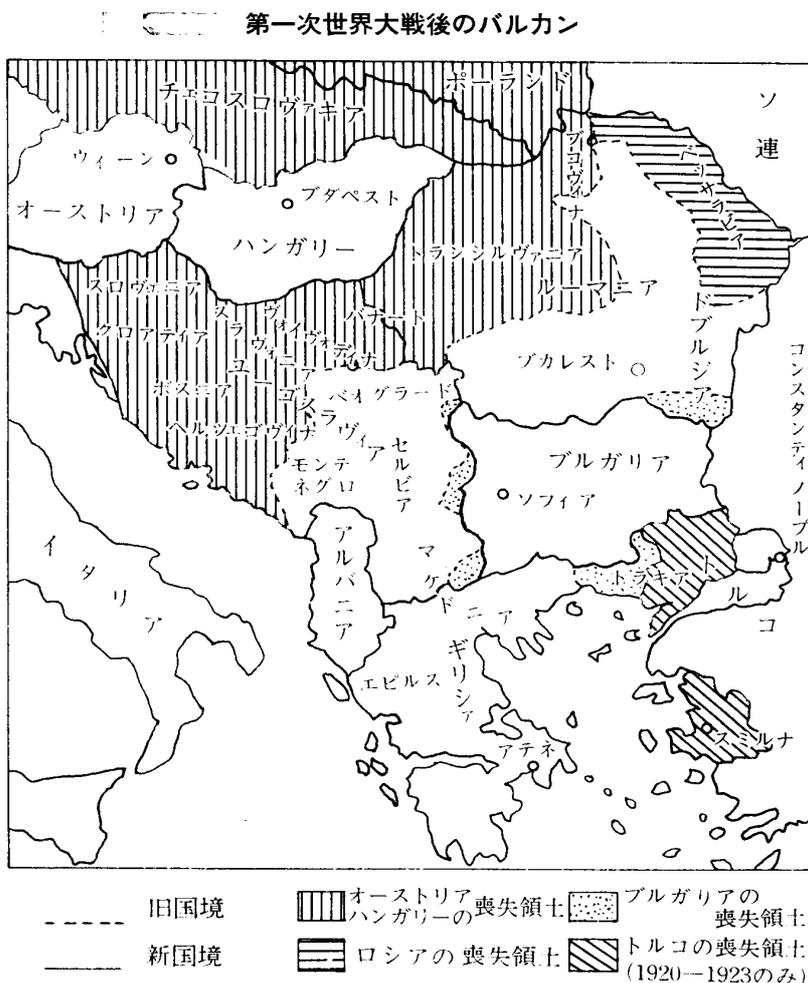
38) 農民同盟は229中109の議席しか得られず、50議席を獲得した共産党の協力がなくては、農業改革等の公約が実行しえない事態に追い込まれた。

39) Internal Macedonian Revolutionary Organization の略。ブルガリアでは、第一次世界大戦前のはじめには ВМОРО (内部マケドニア・オドリノ＝エディルネ革命組織 Вършна Македоно-Одринска Революционна Организация) と呼ばれ、IMRO にあたる ВМОРО は大戦後それが反動的に変質したものだ、として区別される。ここでは通称に従い両者を同一に扱い、IMRO と呼ぶことにする (*Кратка Българска Енциклопедия*, 1, София, 1963, с. 585-586)。

40) マケドニア地方に居住するスラヴ系民族が、言語、習俗等からみてセルビア系かブルガリア系かという点は、歴史的に争われてきており、ことにブルガリアは現在でも、それは独自の民族ではなくブルガリア人の一部であるとする立場に固執し、ユーゴスラヴィアとの対立が続いている。ここでは、論争の内容に立ち入らず、いちおう「マケドニア人」という独自の呼称を使っておく。

41) *Die Kommunistische Internationale*, No. 15 (1921), SS. 466-474.

壊の結果、その領土を倍増し、ベッサラビア、ブコヴィナ、トランシルヴァニア、バナート、南ドブルジアなどの他民族が数多く居住する地域を編入し、困難な民族問題を抱え込んだ⁴²⁾。それにたいする社会主義者の態度は、組織そのものが分散状態にあったこともあり、きわめて不鮮明である。旧ルーマニア王国では、ルーマニア社会民主(労働)党の指導権は第一次世界大戦前から、ドブルジア出身のブルガリア人で、国際舞台でルーマニア、ブルガリア両国の党代表として活躍していたラコフスキーや、ナロードニキの影響の強いユダヤ系ロシア人で、国を追われてルーマニアで活動していたドブ



42) 編入地の民族構成を地域別に概観すれば、トランシルヴァニアは、1910年のハンガリー側の公式調査でも、ルーマニア語使用者280万人、ハンガリー語使用者170万人、ドイツ語使用者50万人、その他20万人となっており、全体としてルーマニア人が過半数を占めたことは疑いない。しかし、ハンガリー人、ドイツ人は旧ルーマニア王国寄りの地域にかなりまとまって居住しており、モザイク状のバルカン諸民族については線引きによる民族自決の実現が困難であることを例示している。バナート地方は、ハンガリー人、セルビア人、ルーマニア人、ドイツ人などの入り乱れた混在地域であり、ルーマニアに編入された全体の3分の2の部分には、ルーマニア人とほぼ同数の他民族が住んでいた。ブコヴィナ地方には、ウクライナ人、ルーマニア人、ユダヤ人、ドイツ人などが住んでいたが、南部でルーマニア人が多数であったのに対し、北ブコヴィナ地方ではウクライナ人が圧倒的に多数であった。ドブルジア地方は「人種の博物館」といわれるように、10種類近い民族の雑居地帯であるが、ルーマニアが1913年の第二次バルカン戦争の結果獲得し、大戦中にブルガリアに奪還され、戦後再編入した南ドブルジア地方は、主としてブルガリア人の居住地域であった。もっとも複雑なのがベッサラビアの場合である。1897年にロシア当局が行った人口調査の結果は上表のようなものである。そこでは、ルーマニア人が過半数には達しないが、相対的に多数民族であることが示されている。ルーマニア編入後ルーマニア人の移植が行われ、両大戦間にはルーマニア人が過半数に達したことは、後述するようにコミンテルンの資料できき認めている。ただ、問題は、ロシア革命当時ルーマニア人

ベッサラビアの主要な民族構成 (1897年、パーセント)

ルーマニア人	47.58
ウクライナ人	19.75
ユダヤ人	11.79
ロシア人	8.05
ブルガリア人	5.33
ドイツ人	3.11

(出所) A. Boldur, *La Bessarabie et les relations russo-roumaines*, Paris, 1927, p. 136.

ロジェアヌ・ゲレア (Constantin Dobrogeanu-Gherea) (本名カッツ M. H. Кац ないしカッス C. Cass) などを中心とする左派の手に渡っており、同党はおおむね反戦主義の立場に立っていたが、しかし党内下部には愛国主義的気運が強く、また党の指導体制も確立されていなかったため、その方針は動揺を続けた。相対的に工業化が進んでおり、社会主義者も多かったトランシルヴァニアのハンガリー社会民主党およびブコヴィナのオーストリア社会民主党のそれぞれのルーマニア人支部は、改良主義的影響を受け、ルーマニア人系ブルジョア政党とともに両地方のルーマニアへの合併を強く主張し、旧王国の党の動揺に拍車をかけた。他方、ロシアの二月革命はロシア戦線にいたルーマニア人兵士に大きな影響を与えたが、1917年6月にオデッサでブジョール (Mihai Gi. Bujor) を中心とする「ルーマニア社会民主主義行動委員会」が結成された。ルーマニアの牢獄から救出されていたラコフスキーもそれに加わったうえで、十月革命ののちにはトロツキー (Лев Д. Бронштейн, Троцкий) によりオデッサ知事に任命されたが、さらにオデッサには「革命的ルーマニア軍団」の本部が置かれた。また、モスクワ戦線のルーマニア兵士、パプスブルク軍捕虜のルーマニア人などが中心になり、モスクワにも革命軍団が生まれた。1918年10月に、オデッサ組織、モスクワ組織、それにルーマニア本国の社会民主党左派の三者代表がモスクワに召集され、「ロシア共産党 (ボ) ルーマニア支部」が結成されたことが発表された。この支部は、本国でルーマニア共産党が誕生したのちも活動を続け、ルーマニアの共産主義運動はその後二重の指導部のもとに置かれることになる⁴³⁾。

戦後の「大ルーマニア」では、当然多様な傾向の社会民主党組織が共存することとなった。ただ、ソ連がルーマニアへの併合を承認していないベッサラビアの組織は、ルーマニア社会民主党に加わらなかった。ルーマニア社会民主党内は、ドブロジェアヌ・ゲレアらの革命派、中央派 (カウツキー派)、旧ハプスブルク系の改良派などに分裂していたが、十月革命後革命派の影響力が強まった。1919年3月にコミンテルンが結成されると、革命派はそれへの加盟を決定するため党大会開催を要求したが、同年5月に開かれた党大会ではトランシルヴァニア、ブコヴィナの組織がそれに強く反対し、結局妥協的な党綱領が採択され、それがコミンテルンに送られたただけであった。コミンテルン加盟も、「共産党」への改名も決められなかった⁴⁴⁾。ところで、ハンガリーのベラ・クン革命へのルーマニア

の中貧農のあいだには、ルーマニアへの合併よりは土地分配を約束するポリシェヴィキ・ロシアへの残留を希望する気運が根強かったことである。その後ソ連が、ルーマニア人が多数民族であることを認めながら、一貫して同地における住民投票を要求した根拠もそこにあるのであり、「民族自決」問題が階級問題とからんだ複雑な性格を持っていたことがわかる [Royal Institute of International Affairs, *South-Eastern Europe*, London, 1939, p. 8; Hugh Seton-Watson, *Eastern Europe between the Wars 1918-1941*, Cambridge (Mass.), 1945, pp. 270-271, 285-286, 296-310; Stavrianos, *Balkans since 1453*, pp. 576-578; C. A. Macartney & A. W. Palmer, *Independent Eastern Europe*, London, 1962, pp. 168-169; H. F. Armstrong, *The New Balkans*, New York & London, 1926, pp. 139-160; Henry L. Roberts, *Rumania: Political Problems of an Agrarian State*, New Haven & London, 1951, pp. 32-39; R. L. Wolff, *The Balkans in Our Time*, Cambridge (Mass.), 1967, pp. 31-50, 97-100, 143-145]。

43) Ghita Ionescu, *Communism in Rumania 1944-1962*, London, New York & Toronto, 1964, pp. 2-10; Roberts, *op. cit.*, pp. 246-247.

44) K. Arbori-Ralli "Die sozialistische Bewegung in Rumänien" *Die Kommunistische Internationale*, No. 7-8 (Nov.-Dez. 1919), SS. 80-92; Ch. Rakovsky "The Communist Movement

の軍事介入にさいして、トランシルヴァニアの社会民主党組織がそれに反対せず、中立の態度をとったこと、1919年5月の選挙にさいしてブコヴィナとトランシルヴァニアの党組織がアヴェレスク (Alexandru Averescu) 将軍の率いる人民党と協力したことにたいして、コミンテルン執行部は強く反発し、ルーマニア社会民主党に代表をモスクワへ送るよう強く要請した⁴⁵⁾。ルーマニアでは、1920年10月に党革命派の呼びかけたゼネ・ストが失敗し、政府の厳しい弾圧が党組織を襲い、その過程でトランシルヴァニア、ブコヴィナの党支部と旧王国の組織の一部が党を離れ、第二インターナショナル系の新しい社会民主党を結成した。党の残りの部分は、同年11月に6名の代表をモスクワに送り、コミンテルン執行委員会の協議に参加させた。執行委員会では、ブハーリン (Николай И. Бухарин) がルーマニア代表に、1) トランシルヴァニアの社会主義者がブルジョア政府に参加したのはなぜか、2) ルーマニアの党の党首がアヴェレスク将軍と秘密協議をしたというのは本当か、3) ルーマニアの党はその政府のハンガリー・ソヴェトへの攻撃や、ロシア白衛軍支援といかに闘ったか、4) なぜ「共産党」と名乗らないのか、5) 開戦当時から党大会を開いていないのはなぜか、と質問した。それにたいしルーマニア側は、トランシルヴァニアの党組織は分裂しており、また同地方での闘争はきわめて困難である、アヴェレスクは民主的になりうると信じていた、等という弁明を行った。またブハーリンは、ルーマニア党代表団のなかに、トランシルヴァニアの労組指導者でパリ講和会議にルーマニア代表の一員として参加したフルエラシ (Ion Flueraș) が加わっていることに強く反対し、退場させた。つぎの会合でジノヴィエフ (Григорий Е. Зиновьев) は、ルーマニアの労働者階級はコミンテルンを支持しているが、その指導者は動揺しているということが代表の報告から明らかになった、ルーマニア党中央は戦争中も戦後も日和見主義政策をとっている、と厳しくきめつけ、それにたいする容赦のない批判を公開状の形で行う必要がある、と述べた⁴⁶⁾。公開状にたいしルーマニアの党執行委員会は、いくつかの点で自己批判を行ったのち、ジノヴィエフ同志はルーマニアの党綱領を注意深く読んでいない、トランシルヴァニア問題で中傷を行っている、大衆がコミンテルン参加を支持しているというのは事実に対する、顔をそむけている大衆にそれを支持させようと党は苦勞しているのだ、等という点について反論を試みた⁴⁷⁾。

翌1921年3月に、ルーマニアの党はヤシで各地の代表を集め秘密会議を開いたのち、5月8日から12日までブカレストで党大会を開催し、コミンテルンへの加盟について表決した。会議の途中で警察が会場に踏み込んで参加者多数を逮捕したが、逮捕を免れたものが13日に秘密会議を開き、コミンテルン加盟決議が行われたことを確認し、コミンテルンへの連帯メッセージを送った。この大会がのちにルーマニア共産党第1回大会と呼ばれることになった⁴⁸⁾。なお、1922年10月に開かれた第2回党大会で、党名が正式に「ルー

in Rumania” *The Communist International*, Ser. I, No. 13 (Aug. 1920), pp. 112-113; Ionescu, *op. cit.*, pp. 10-14.

45) *Die Kommunistische Internationale*, No. 15 (1921), SS. 408-409.

46) *Ebenda*, SS. 408-417.

47) *Ebenda*, No. 16 (1921).

48) Ionescu, *op. cit.*, pp. 17-20; Marin Nedelea “Congresul de întemeiere a Partidului Comunist Român” *Anale de istorie*, XVII 2 (1971), pp. 3-15.

マニア共産党、共産主義インターナショナル支部」とされ、暫定規約が採択され、中央委員が選出された。なお、この大会でベッサラビアの党組織がルーマニアの党に編入された。

ギリシアでは、社会主義勢力はもともと大きな影響力を持たなかったが、そのうえに第一次世界大戦中そのほとんどがヴェニゼロス (Eleutherios Venizelos) の親連合政策を支持し、またマケドニア、エピルス、スミルナ等を含む「大ギリシア主義」の立場をとっていた。その点で彼らの主張は、他のバルカン諸国の右派社会主義者、たとえばブルガリア社会民主党「広義派」などの主張とまっ向から衝突するものであった。ただ、テッサロニキの労働連盟だけが反戦主義の態度をとり、後述するバルカン連邦運動にも参加し、自国も含むバルカン諸国の領土的野心を非難した⁴⁹⁾。十月革命後、各地のマルクス主義者を結集する気運が芽生え、1918年11月5日になってアテネで左派中心の社会主義者の統一集会が開かれ、ギリシア社会主義労働党を創設することが決定された。集会では少数派が「大ギリシア主義」の立場を主張したのにたいし、多数派は「バルカン民主主義連邦」の設立を要求する決議を採択した。しかしその内容は、ギリシアを「自治地区の連邦」に再編成することによって東部（トラキア）のブルガリア人、トルコ人に自治権を与え、その後バルカン連邦に参加させるというものであり、他の社会、経済問題にかんする主張が民主主義要求の枠を出ていないこととあいまって、この新しい党がポリシェヴィキとはかなり性格の違ったものであることが示された⁵⁰⁾。

1919年のコミンテルン結成後、5月にこの党の全国集会が開かれ、激しい討議のすえ第二インターナショナルと絶縁することが決定されたが、コミンテルンへの参加提案は否決され、参加の準備をするが第二インターナショナル左派の諸党との協力関係も維持するという折衷的な決議が採択された。その後もコミンテルン加盟をめぐる左右の党内闘争が続いたが、国際情勢と国内危機の影響で左派の力がしだいに強くなり、1920年4月の第2回党大会はコミンテルン加盟を正式に決定した。中央集権を特徴とする党憲章と階級闘争を重視する宣言が採択され、党名のあとに括弧して（共産主義者）という字句を付け加えることが決定され、その後この党はギリシア共産党と呼ばれるようになった。しかし党員は少数のグループにすぎず、そのイデオロギー的基礎もきわめて不安定なものであった⁵¹⁾。

以上、コミンテルン創設期前後のバルカンの社会主義運動を各国別に概観してきたが、そのほかにバルカン半島には、第一次世界大戦前から社会主義者の国際的な提携の動きがあったので、それについても簡単に触れておきたい。バルカンの社会主義運動、ことにセルビアやブルガリアのそれは、すでに19世紀末から、バルカンの民族対立を克服し諸列強の介入を阻止するために、民主主義的連邦を結成するという構想を支持してきたが、20世紀に入ってその共同行動は強化され、また第二インターナショナルも社会主義運動の統一を要請してきた。1910年1月に、セルビアとブルガリアの社会民主党の呼びかけによ

49) L. S. Stavrianos, *Balkan Federation: A History of the Movement toward Balkan Unity in Modern Times*, Hamden (Conn.), 1964, pp. 200-201.

50) D. George Kousoulas, *Revolution and Defeat: The Story of the Greek Communist Party*, London, New York and Toronto, 1965, pp. 1-2.

51) *Ibid.*, pp. 3-4; *Die Kommunistische Internationale*, No. 14 (1921), SS. 295-296.

り第1回バルカン社会民主主義会議がベオグラードで開催された。会議には、セルビア、ブルガリア（「狭義派」）、ルーマニア、トルコ、クロアチア・スラヴォニア、ユーゴスラヴィア（スロヴェニア）、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、マケドニア、モンテネグロの各党代表合計32名が参加した。会議で採択された決議は、バルカンを隷属させようとするヨーロッパ諸列強とバルカンに新しい敵対を生み出している王党派や資本家を強く非難するとともに、「諸国民のあいだのあらゆる敵対と闘い、……人民の完全に民主主義的な自治と諸国民の独立をめざすあらゆる動向を支持する」と述べ、それを実現するのは王家でもブルジョアジーでも、ヨーロッパの資本主義諸国でもなく、社会民主主義のみである、とした⁵²⁾。その後バルカンの社会民主党の共同行動は盛んになり、バルカン戦争の時期にもいくつかの統一集会が開かれた。第一次世界大戦は各国の党組織の分裂と国別の多様化を促進したが、しかし反戦主義の立場をとるセルビア、ブルガリア（「狭義派」）、ルーマニアの各社会民主党は、ギリシアのテッサロニキの社会主義者を加えて、1915年7月に第2回バルカン社会民主主義会議をブカレストで開催した。この会議はさらに明白に、支配階級の意図は新しい領土の獲得でしかなく、彼らはマケドニア、ドブルジア、トラキアの人民を迫害と抑圧の体制のもとにおいている、と述べるとともに、社会民主主義者にとって「バルカン共和国連邦の実現のために闘うことがその義務であり、また利益でもある。バルカン戦争と世界戦争は、いかなる大国の後見をも受けないバルカン諸国民の独立した同盟のみが、その自由と一体性を保障しうることを証明した」、とする宣言を発表した⁵³⁾。

ロシア革命と終戦がバルカン各地の社会主義運動を急進化させ、左派の組織化を促したことは前述した通りである。1919年3月のコミンテルン第1回大会には、前記のようにラコフスキーが「バルカン社会主義連邦」の名で正式に参加した。1920年1月には、ソフィアで第3回バルカン社会民主主義会議が開かれ、ブルガリア共産党、ユーゴスラヴィア社会主義労働者党（共産主義者）、ルーマニア社会民主党、ギリシア社会主義労働者の代表が参加した。この会議で、統一体としての組織を確立し、その名称をバルカン社会主義連邦からバルカン共産主義連邦と改め⁵⁴⁾、連邦として正式にコミンテルンに加盟することが決定された。さらに会議は、バルカン諸国が協商国の植民地に成り下った、と述べたのち、「社会革命のみが諸小国に自由な生存と独立した発展を保証することができる。それは、諸小国から巨大な国家債務を取り除き、多くの国の生産力を解き放ち、それらを国境の狭さから救い、諸小国をひとつの経済同盟に統合することにより、大きな領域への自由な出口を開くであろう。……プロレタリア革命とプロレタリア独裁のみが、……バルカン諸国をあらゆる抑圧から解放し、それらに自決の可能性を与え、それらすべてを単一のバルカン社会主義ソヴェト共和国に統合することができる」、とする決議を採択した⁵⁵⁾。

52) Stavrianos, *Balkan Federation*, pp. 186-187, 289-291 (appendix E).

53) *Ibid.*, pp. 198-199.

54) したがってこの会議は、第1回バルカン共産主義連邦会議とされるが、それ以前と通算する呼び方をすることもあり、ことに数年後にはコミンテルンでは一般に通算した数え方をするようになるので、以下第1(3)回会議という形で双方を併記する。

55) *Ibid.*, pp. 205, 303-306 (appendix I); Joseph Rothschild, *The Communist Party of Bulgaria: Origins and Development 1883-1936*, New York, 1959, p. 223; *The Communist Inter-*

以上の動向から指摘できることは、第一に、マルクス主義の伝統的イデオロギーと国際的な革命情勢の影響のもとで、当時のバルカン左派社会主義運動が「民族問題」を独立した課題としてはほとんど取り上げておらず、ユーゴスラヴィアの例を典型として、民族問題はブルジョアジーに起因するとする立場を多かれ少なかれとっていたこと、第二に、それと関連して、「プロレタリア革命のみが……」という決議文にも示されているように、階級的課題をなによりも優先してとらえていたこと、第三に、「バルカン連邦」ないし「単一のバルカン社会主義ソヴェト共和国」というような「大きな領域」への統合指向を当面の政治課題として掲げていたこと、第四に、以上のような傾向が、革命前後のポリシェヴィキ指導者の思想や、すくなくとも創設当時までのコミンテルンの方針とは矛盾するものではなかったこと、である。

4. コミンテルンのバルカン民族政策の形成

中部ヨーロッパを中心とする世界革命の動向に注意を集中し、バルカン情勢にほとんど目を向けていなかった創設期のコミンテルン指導者も、1920年代に入るとその態度を変え、ことに世界革命の展望がそれほど楽観できなくなり、他方でバルカンの党組織との連絡も確立されてくるにつれて、しだいにバルカン問題に強い関心を示すようになり、それにともなって現地共産党との摩擦が増加してくることになる。その経過を、つぎには主としてコミンテルン側に視点を置いてたどってみたい。

前述したように、第1回コミンテルン大会は1919年3月2日—6日にモスクワで開催されたが、大会の特徴は、第一に、ドイツ革命を中心としてヨーロッパ中が革命と反革命の激動期にあったために、全般にきわめて国際主義的雰囲気が強かったことである。大会で採択された「基本方針」は、「諸国家の国境を廃止し、全世界を一つの自律的な共同体に変える」ことを訴え、「プロレタリア・ソヴェト国際共和国万歳！」と結んだ⁵⁶⁾。第二に、ことに小国については、「民族」単位の自立よりは、より大きな規模の連邦ないし連合を志向する傾向が大会では一般的であった。「全世界のプロレタリアートにたいする共産主義インターナショナルの声明」は、「資本主義の発達に強力な刺激を与えた民族国家は、生産力のいっそうの発展にとってあまりにも狭いものになった。このことはヨーロッパや世界の他の部分の列強に隣接した諸小国の地位を、ますます不安定なものにしている。……諸小国の人民はプロレタリア革命によってのみ存続する可能性を保証されるのであり、それのみが民族国家の束縛からあらゆる国の生産力を解放し、共同の経済計画の基礎のうえに諸国民を緊密な経済協力の方向で結束させ、さらにはもっとも小さく、弱い国民にさえ、ヨーロッパおよび世界の統一かつ集中的な経済を害することなく、自由に独立して彼らの民族文化の問題を処理する可能性を与えるのである⁵⁷⁾」と述べている。第三に、バルカンについてであるが、東欧に新しく作られた国家については、「国際情勢と協商国の政策に

national, Ser. I, No. 11-12 (Jun.-Jul. 1920), pp. 2455-2460.

56) *Der I. Kongress der Kommunistischen Internationale, Protokoll der Verhandlungen in Moskau vom 2. bis zum 19 März 1919*, Hamburg, 1921 (以下 *Protokoll, I. Kongress* と略す、以下各大会についても同じ), SS. 186, 192.

57) *Ebenda*, SS. 175-176.

かんするテーゼ」にみられるように、大会はそれを協商国によって「民族的反革命運動の中心」としてこしらえあげられた「隷属国家」と規定している⁵⁸⁾。この規定は、その後のコミンテルンのバルカン政策の出発点となるものであるが、まだこの段階では、だからそれを解体せよという結論が前面に出されるのではなく、なによりも階級闘争を優先する視点（「労働の資本にたいする戦争」）が一貫していた。バルカンそのものへの関心は薄く、その民族問題についてはまったく言及がなされていない。この大会への招聘状は、バルカンではブルガリア、セルビア、ルーマニアの組織に出されたが、前述したように参加したのは、バルカン社会主義連邦を代表したラコフスキーとブルガリア人、ユーゴスラヴィア人各1名で、いずれもモスクワ在住者であった。大会でも、ラコフスキーがユーゴスラヴィアの党指導者の一部が西ヨーロッパで行った行動を批判した⁵⁹⁾以外に、バルカン情勢は議論の対象とならなかった。大会で決定された執行委員会には、ロシア、ドイツ、ドイツ・オーストリア、ハンガリー、スイス、スカンディナヴィアの各党代表と並んで、バルカン連邦の代表（ラコフスキー）が参加することになった⁶⁰⁾。

ところで、第1回大会後バルカン情勢は急速に変動した。1919年3月に樹立されたハンガリー・ソヴェトは、近隣諸国の社会主義運動からの支援をえられないまま、ルーマニア軍などの介入により7月から8月にかけて崩壊した。それにさいして、ルーマニアの党組織が介入反対の運動を十分に組織しなかったことにコミンテルン指導者が激怒した事情については、前述した通りである。他方、南スラヴ地域では、同年末から1920年にかけて左派農民党と共産主義政党の影響力が急伸し、ブルガリアとユーゴスラヴィアで政治情勢全体を左右するほどの勢いを示しはじめた。コミンテルン指導部がバルカン情勢に注目しはじめた⁶¹⁾のは、自然の成り行きであった。それは、執行委員会の一部を構成する「バルカン連邦」を恒常化し、それを通じて指導を強化することをめざし、1920年1月にバルカン社会主義連邦を改組し、バルカン共産主義連邦を成立させた。そのさい、その後の発展との関係で重要なことは、党の全体的力量、モスクワ在住者の層の厚さなどの関係で、ブルガリアの共産主義者がこの連邦のなかで指導的役割を演じはじめたことである。また、コミンテルンの「反協商」「反ヴェルサイユ」路線が、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、ギリシアの場合とは反対に、敗戦国ブルガリアの政治的気運にとってなじみやすかったことも、彼らのモスクワでの活動を活発にさせる要因となった。

1920年3月5日になって、コミンテルン執行委員会は、ジノヴィエフの起草した「バルカン・ドナウ諸国のプロレタリアートへ、ブルガリア、ルーマニア、セルビア、トルコの共産党へ」と題する訴えを発表し、そのなかでつぎのような分析を加えた。「オーストリ

58) *Manifest, Richtlinien, Beschlüsse des ersten Kongresses; Aufrufe und offene Schreiben des Exekutivkomitees bis zum zweiten Kongress*, Hamburg, 1920, SS. 77, 80-81.

59) *Protokoll, I. Kongress*, S. 57; *The Communist International*, Ser. I, No. 1 (1919), p. 70; Ser. I, No. 4 (Aug. 1, 1919), pp. 122-123.

60) *Protokoll, I. Kongress*, SS. 200-201.

61) 1920年10月のドイツ独立社会民主党大会に出席したジノヴィエフは、世界革命の機が熟しつつある例として、バルカン諸国までが「プロレタリア革命のための熟した果実」となっている、という発言をしている (E. H. カー、宇高基輔訳『ポリシェヴィキ革命、1917-1923』第3巻、みすず書房、1971年、168ページ)。

ア・ハンガリーの解体とブルガリア、トルコの敗北後の新しい民族的分割は、バルカン半島の民族問題を戦前よりもいっそう複雑なものにした。勝者の支配下に、以前よりはるかに多くの異民族が置かれるようになった。民族抑圧政策、貪欲な軍国主義政策は、さらに大きな解放への衝動を呼び起こし、解放闘争はより広い規模に達している。セルビア官僚・地主寡頭制にたいして、マケドニアのブルガリア人、アルバニア人、モンテネグロ人、クロアチア人、ボスニア人が立ち上っている。ルーマニア寡頭制にたいしては、ルーマニアの地主が略奪した新旧ドブルジャのブルガリア人およびトルコ人農民ばかりでなく、トランシルヴァニアのハンガリー人とドイツ人、それにブコヴィナのロシア人とウクライナ人もまた闘っている。ギリシアの商業・投機・高利貸ブルジョアジーの支配にたいしては、エピルスのアルバニア人と同様にトラキアのトルコ人およびブルガリア人農民も闘っている。……プロレタリアートだけが、その勝利によって新しい戦争を防止し、労働者・農民大衆を経済的および民族的抑圧から解放しうる。プロレタリア独裁の勝利だけが、連邦社会主義バルカン（またはバルカン・ドナウ）ソヴェト共和国に全人民大衆を結集し、彼らを内外のブルジョアジーの封建的、資本主義的搾取から、また植民地的隷属と民族的軛轢から解放しうる。したがって共産党はバルカン半島においては、民族問題の存在しない同規模の人口をもつ資本主義国と較べてより大きな役割を演じる義務がある。バルカン共産党の全努力は、バルカン半島における共産主義のこの偉大な歴史的役割に向けられなければならない」。さらに訴えは、ルーマニア、ユーゴスラヴィアの労働者がハンガリー・ソヴェトを支援しえなかった経験からみて、バルカンの各共産党間の「行動の緊密な結合と協力」が必要であること、さらには、バルカンの党が労働者とともに「勤労農民、貧中農」を共産主義運動に引き入れる必要があること、を主張した⁶²⁾。この文書は、コミンテルンがはじめてバルカンの民族問題に注意を向けたこと、しかも被抑圧民族や少数民族の闘争を共産主義運動と結びつけてとらえたことを萌芽的に示している。

このようなコミンテルンの態度の変化は、1920年7月19日から8月7日に開かれたコミンテルン第2回大会が民族問題一般に大きな関心を示したことと照応している。しかしそこではまだ、あらゆる民族抑圧に強く反対しながら、民族自決権を一般的な形で提起したり、現実の政治的分離のための行動を指示したりする方針は見られない。この大会に向けてレーニンが起草した「民族・植民地問題にかんするテーゼ草案」は、(1)「抽象的、形式的な民族の平等を含む平等一般の問題の立て方は、その本質からしてブルジョア民主主義に固有のものである。……真の平等は階級廃絶の要求によってのみ表わしうる。」(2)「抑圧された階級の利益と、支配階級の利益にすぎない全体としての民族的利益とは明白に区別すべきである。」(3)「将来のプロレタリア政党の要素が結集され、その特別な任務にかんする知識で教育されるという条件が満たされる場合にのみ、共産党は植民地や後進国のブルジョア民主主義的民族運動を支持すべきである。」(4) 帝国主義は強大であり、すべてのソヴェト共和国を緊密に結びつけなければそれに対抗できず、すべての諸国のプロレタリアートが総合的計画を立てて、単一の経済運営を実現する必要があるので、ソ連内外の連邦を強化する必要がある、等の点を強調した⁶³⁾。第2回大会では、この草案の大綱

62) *Die Kommunistische Internationale*, No. 9 (1920), SS. 185-186.

63) *The Communist International*, No. 11-12 (Jun.-Jul. 1920), pp. 2155-2158.

にそった「民族・植民地問題にかんするテーゼ⁶⁴⁾」が採択された。大会には、ブルガリアからカバクチェフ (Христо С. Кабакчиев) を初め3人の代表が出席したのに、ほかのバルカン諸党ではユーゴスラヴィアからミルキチが1人出席しただけであった⁶⁵⁾ことは、同大会で採択された有名なコミンテルン規約にかんする報告をカバクチェフが行ったこととあわせて、ブルガリアの党の役割がきわめて大きくなっていることを示した。バルカン問題については、この大会でもほとんど言及がなかったが、ただ、ジノヴィエフが、ユーゴスラヴィアの党機関紙に多くの改良主義者の論文が載っているが、「明白な改良主義者を党内に留めておくことは不可能である点をユーゴスラヴィアの党に注意しなければならない」と述べたのにたいし、ミルキチは「ユーゴスラヴィアの党はけっして日和見主義的な党ではない」と強く反発したことが記録されている⁶⁶⁾。

同年8月10日に、「共産主義バルカン・ドナウ連邦」は、ブルガリア、ユーゴスラヴィア、ギリシア代表によって署名された声明を発表した。それは、大戦後民族抑圧が強まったとし、「ブルガリア人はもっとも残酷な方法でばらばらに細分化された。その大きな集団が、マケドニア、ドブルジア、トラキアで外国の支配のもとに置かれている」と述べ、さらに、ルーマニアにおいては、ドブルジアのブルガリア人、トルコ人、ベッサラビアのロシア人、トランシルヴァニアのハンガリー人、バナートのスラヴ人、ユーゴスラヴィアにおいては、マケドニア人、アルバニア人、ヴォイヴォディナ (旧バナート他) のハンガリー人、ドイツ人、ダルマチアのイタリア人、ギリシアにおいてはブルガリア人、トルコ人、アルバニア人などにたいする民族抑圧が行われていると非難した。また声明はそれに続いて、「バルカン・ドナウ諸国の共産党は、戦前同様に現在もいかなる民族抑圧にも敵対し、ある国民ないし国民の一部の他の国民による奴隷化に反対することを宣言する。われわれはバルカン・ドナウ諸国民のもっとも完全な民族的自由と同権、およびすべての国民の自決権を支持する。しかしながら、同時にわれわれは、これら諸国民の統一が連邦バルカン・ドナウ・ソヴェト共和国の枠内でのみ可能であり、そのみがこれら諸国民に同じ権利と同じ発展の可能性を保証するものであると宣言する」と述べた⁶⁷⁾。この声明にも、ブルガリアの党の見解と立場が大きく反映されたこと、ヴェルサイユ体制受益国内の少数民族抑圧問題に厳しい視線が注がれ始めたこと、しかし、民族問題の解決はプロレタリア革命とバルカン連邦結成によってのみ可能であるとするそれまでの立場が基本的には持続されていること、を見ることができると述べている。

コミンテルン第2回大会後、国際情勢には重要な変化が生まれた。第2回大会の会期中にワルシャワに進撃した赤軍は重大な敗北を喫し、世界革命がただちにヨーロッパに拡大

64) *Protokoll, II. Kongress*, SS. 224-232. なお、主として植民地の民族問題を中心にこのテーゼを考察したものに、松元幸子「初期コミンテルンにおける民族解放理論の形成—コミンテルン第2回大会におけるレーニン・ロイ論争を中心に—」『歴史学研究』355号 (1965年12月号) がある。また、E. H. カー、前掲、191-197ページ、参照。

65) *Ebenda*, SS. 780-788.

66) *Ebenda*, SS. 254, 287-288.

67) *Die Kommunistische Internationale*, No. 14 (1921), SS. 234-235. この声明を3月のコミンテルン執行委員会の「訴え」と比較すると、後者にはクロアチア人、「ボスニア人」、ウクライナ人が、前者には「マケドニア人」、イタリア人が、それぞれ他方と違って挙げられていること、民族的抑圧の発生している地域と民族の分類に差があることがわかり、興味深い。

するという希望は急速に色あせていき、それと裏腹に、ヨーロッパでの対ソ干渉の気運も沈静していった。中西部ヨーロッパへの「熱い期待」が薄らぐとともに、コミンテルンのバルカンへの関心はさらに強化された。1921年2月にバルカン共産主義連邦の組織強化のための会議がウィーンで開かれ、ギリシア以外のバルカン各党代表とコミンテルン執行委員会代表2名が出席した。コミンテルン代表は、「連邦」の主目的がコミンテルンのための情報提供と英仏による対ソ「防疫線」結成計画の打破にあると述べたのにたいし、ユーゴスラヴィア代表クレメンチチ (Lovro Klemenčič) は、英仏の影響と闘うことも重要だが、連邦にはそれ本来の政治的機能がある、とそれに反論した。結局会議は、「連邦」に各党代表1名から成る執行局を設け、コミンテルンの直接の指導下におく、「連邦」の会議は原則として6カ月ごとに開くが、各党の代表はその判断において自己の党中央ではなくコミンテルンの諸決定を優先させる、コミンテルンの諸会議へは「連邦」としてではなく、各党が個別的に代表を送る、などの点を決定した⁶⁸⁾。同年5月に「連邦」の第2(4)回会議がソフィアで開かれたが、ブルガリア政府の妨害のためブルガリア、ユーゴスラヴィアの両党代表しか集まらなかった。会議はコミンテルンの路線にそって、「小協商」をフランスの召使たちの集まりであるときめつけ、反ソ戦争準備と闘うことを誓った決議を採択した⁶⁹⁾。

その直後、すなわち1921年6月22日—7月12日に、コミンテルン第3回大会が開かれた。この大会は、ヨーロッパの革命情勢の退潮を反映し、また同年3月にNEPを採択し、イギリスと通商協定を結び、内外政策を方向転換したソ連の影響を受けて、「大衆のなかへ」というスローガンを打ち出し、それぞれの国の条件のもとでの「同盟者」の発掘に目を向けたという意味で重要な会議である。コミンテルンがバルカンの民族運動そのものを「同盟者」として高く評価しはじめきっかけはこの大会が打ち出した路線にあるといえるが、大会そのものではまだバルカンの民族問題そのものは取り上げられていない。大会では、ジノヴィエフがユーゴスラヴィアの党を、日和見主義を温存しており、また十分な情報をコミンテルンに出していないと批判したのにたいして、ユーゴスラヴィア代表マルコヴィチが、自己の党は日和見主義とつねに闘ってきたし、また情報もつねに出している、と反論した⁷⁰⁾。また、大会に出席したギリシアのゲオルギアデス (Georgios Georgiades) にたいして、ブルガリアのコラロフ (Васил П. Коларов) が、マケドニアの自治要求にたいしてギリシアの党が明確な態度を示すことを求めたのにたいし、後者は明言を避けたといわれる⁷¹⁾。他方大会は、退潮期の情勢に適応するために、共産党の規律を強化し、統一方針に反対するものを党から排除せよという厳しい方針を打ち出すと同時に、コミンテルン執行部と各支部との関係をさらに緊密なものにすることを決定した。公式機関誌『コムニスター・チェスキー・インテルナツィオナル』を定期的な月刊誌とするほか、より大衆的な週刊紙『インテルナツィオナレ・プレッセ・コレスポンデンツ』を発行す

68) Rothschild, *op. cit.*, pp. 227-231. この最後の点は、「連邦」が強固なブロックになることをソ連がむしろ嫌い始めたことを示すとの評価もある (*Ibid.*, p. 231)。

69) *Ibid.*, pp. 231-232.

70) *Protokoll, III. Kongress*, SS. 210, 267-271.

71) Kousoulas, *op. cit.*, p. 54.

ることが決められたほか、執行委員会がその後改組され、その権限が多くの面でさらに強化されることになった⁷²⁾。

このような発展を反映して、1922年から翌年にかけて、コミンテルンのバルカン諸党にたいする注文はしだいに増大した。便宜上、バルカン諸国のそれぞれに分けて、その経過をたどってみよう。

まず、ユーゴスラヴィアであるが、1920年6月に社会主義労働者党（共産主義者）の左派が結成した共産党も、その構成員の性格は依然として多様であり、その後人的反感、活動方法、民族問題などをめぐり一貫して派閥抗争を経験することになる。1920年代当初の新生ユーゴスラヴィアでは、急進党のパンチ政権にとって、一つの脅威は、新国家樹立にさえ反対したラディチ（Stjepan Radić）の率いるクロアチア共和農民党が、クロアチア人の圧倒的多数の支持をえて中央集権的な新国家に敵対していたことであるが、もう一つは前述したように、1920年の選挙で共産党が驚異的な得票をし、政権の基盤を脅かしたことである。政府は1920年12月の「布告」により労働運動に厳しい制限を加え、翌21年8月には共産党を非合法化し、徹底した対決政策に乗り出した。苛酷な条件に追い込まれた共産党では、まず非合法活動に徹するか、合法性の再建をめざすかについて意見の対立が先鋭化した。党の指導権を握っていたのは党創立大会で書記に選ばれていたマルコヴィチやミロイコヴィチ（Života Milojković）らの「右派⁷³⁾」であり、それにたいしてカツレロヴィチ、ノヴァコヴィチ（Kosta Novaković）、ツヴィイチ（Đuro Cvijić）らの「左派」が、1921年4月の中央委員会で合法活動を強調する執行部を批判して以降、ことごとに両派の対立は深まっていった。1921年6月の党中央委員会は、マルコヴィチらがコミンテルン第3回大会に出席し不在であった機会に非合法組織の建設を決定してしまい、対立が表面化したので、同年12月31日にコミンテルン執行委員会は左右の代表をモスクワに呼び、調停を図っている。民族問題については、「左派」が政府のセルビア中心主義により強い態度をとってはいたが、しかしカツレロヴィチ、ノヴァコヴィチらセルビア人が「左派」の中心を占めていたことからわかるように、分裂は党内の民族構成を反映したのではなく、また当初は民族問題は対立のごく副次的な側面であったと思われる。1922年7月にウィーンで、ユーゴスラヴィア共産党第1回全国協議会が開かれたが、規律違反、党費濫用などをめぐって左右の対立は泥沼化し、ノヴァコヴィチら「左派」は会議の途中で帰国してしまった。その結果、新指導部のほとんどを「右派」が占めることになり、採択された決議も、民族問題については、クロアチアのプロレタリアートに「ナショナリズムの危険な感染」にたいする警戒を求め、少数民族の「文化的・民族的権利」の完全な保護を主張するという、それまでの立場を反映したものとなった⁷⁴⁾。

1922年11月5日から12月5日にかけて、コミンテルン第4回大会が開催された。この大会は、世界革命にたいする前回以上に悲観的な見通しのもとで「統一戦線戦術」の理解

72) 機構改革については、E. H. カー、前掲、297ページ；ソ連共産党附属マルクス・レーニン主義研究所編、村田陽一訳『コミンテルンの歴史』上巻、大月書店、1973年、115-118ページ、参照。

73) 当時この党については、「左右」の区別はイデオロギー的にも人的にも不明確であるが、慣例にしたがってこの呼称を使うこととする。

74) Avakumović, *op. cit.*, pp. 62-65; *Преглед историје СКЈ*, стр. 96-99.

について激論が行われたこと、また、「ソヴェトの政策の面からすれば、外務人民委員部がコミンテルンの犠牲において優位にたった。その他の諸国では、ソヴェト・ロシアを支持することが誠実な革命家の至高の義務となった。第四回大会以来、このことが公言されるようになった⁷⁵⁾」という評価に示されるように、コミンテルンから世界革命の本部としての性格がさらに薄れたことを象徴したこと、などの特徴をもつものであった。バルカン問題にかんしては、大会はそれまでよりもいくらか大きな関心を示した。執行委員会報告においてジノヴィエフは、「わがバルカン連邦はうまく機能していない」とし、「ブルガリアの党に、バルカン連邦の強化についてより大きな注意を払うよう要請しなければならない」と述べたあと、「ユーゴスラヴィアでは、党は危機を経験している。そこでも合法か非合法かの問題が表面化している。その問題は、そこではまだ解決されていない」とし、ユーゴスラヴィア党内の意見対立については別の委員会で扱う、と発言した⁷⁶⁾。大会で発言したユーゴスラヴィアの党代表（右派）は、「小協商」がフランス帝国主義のお先棒をかつぎ、反ソ計画を進めており、ヴェルサイユ体制と、それに反発する「失地回復主義諸国」の対立が民族問題を先鋭化させているが、こうした諸関係は「さまざまな民族のあいだばかりでなく、一民族の内部の部族間の関係をも悪化させている。その古典的な例がユーゴスラヴィアであり、そこでは同一民族に属するセルビア人とクロアチア人の対立が激化し、もっとも強力なクロアチアの党は完全独立のスローガン掲げるにいたっている」とし、対立の基礎は内政だけでなく外交面にもあり、セルビア人がヴェルサイユ体制やその賠償政策の受益者であるのに、他の地域のブルジョアジーは賠償に直接利益を感じないため反政府的になっている、と述べて⁷⁷⁾、それまでの民族問題にかんする態度を変えていないことを明らかに示した。ジノヴィエフの示唆したユーゴスラヴィア委員会の決議は、ユーゴスラヴィアの党が敵の攻勢に強く反撃しなかったこと、非合法組織を十分に準備していないこと、などの点について批判したが、民族問題についてはなにひとつ批判を加えず、分派闘争は「個人的性格」のものだと指摘し、相互の不信を棄てて共同行動に全力を尽すよう勧告した⁷⁸⁾。ユーゴスラヴィアからは左右両派が別々に代表を出しており、その両者がともにこの決議を実行することを誓った⁷⁹⁾。

コミンテルン第4回大会の直後、12月8日から12日までモスクワで第3(5)回バルカン共産主義連邦会議が開かれ、ギリシア以外の3党が参加したが、ジノヴィエフからバルカン連邦の強化を委ねられたブルガリアの党指導部は、マケドニアとトラキアの自治と独立の擁護という路線を前面に押し出しはじめ、ユーゴスラヴィアの党はそれに反発した⁸⁰⁾。しかし、まだこの段階では、それは自治一般を支持するというのではなく、革命を

75) E. H. カー、前掲、337 ページ。

76) *Protokoll, IV. Kongress*, SS. 49-50. なお、トルコ代表が自国での共産主義者迫害について強く訴えたのにならして、ケマル政権との友好関係を確立したソ連の立場を代弁して、ラデク (Карл Б. Радек) が、トルコの共産主義者の第一の任務は民族解放運動を支持することであり、「現在の瞬間の事態にとらわれて近い将来のことを忘れるな」と述べたことが注目される (*Ebenda*, SS. 526-532, 629-630)。

77) *Ebenda*, SS. 779-781.

78) *Ebenda*, SS. 941-944.

79) *Ebenda*, SS. 944-945.

80) Shoup, *op. cit.*, p. 31.

経て形成される社会主義連邦のなかの自治をめざすという内容に限られていたことが注意されなければならない。同会議で報告したブルガリアのカバクチェフは、トラキアについては、「ブルガリアはトラキアの自治を要求しているが、それは自治の装いのもとに併合を試みているのだ。ギリシアとブルガリアのブルジョアジーはともにトラキアの征服をねらっている。彼らは住民の独立と自治にとっては敵である。バルカンの共産党、ことにブルガリアとギリシアの共産党は、民族解放と自治のための彼らの闘争を助けるであろう。それと同時にそれは、トラキア人民が、労働者と農民の革命闘争によってのみ、連邦社会主義バルカン・ソヴェトを実現することによってのみ、その民族独立を達成しうることをはっきりと強調するものである」と述べ⁸¹⁾、またマケドニアについては、「……こうした不満が民族主義的武装運動を引き起こしたが、ブルジョアジーは自己の反動的目的と征服政策を推進するためにそれを利用している。……バルカン共産党は、これら諸民族の民族独立と自治をめざす闘争を全力あげて支持する。またバルカン共産党は、民族運動から近隣諸国のブルジョアジーの影響を排除し、それをバルカン社会主義連邦ソヴェト共和国の構成部分としてのマケドニア・ソヴェト共和国の樹立をめざす革命闘争の道に導くために活動する」と述べた⁸²⁾。他方、この会議の直後の12月15日に、ユーゴスラヴィア共産党はその合法組織として独立労働者党を結成することを決定したが、党綱領作成過程で左右の対立が再燃し、そのなかで民族問題が重要な論点となるにいたった。「右派」の指導者ミロイコヴィチは、ユーゴスラヴィアは単一民族国家であり、党はナショナリズムの危険と闘わねばならないと主張したが、「左派」はクロアチア、スロヴェニア人の大セルビア主義との闘いを支持せよと主張した。結局この党では「右派」が指導権をとり、民族問題は階級闘争をそらす役割を果たすとし、国内の民族対立は「さまざまな地域の部族センター」のあいだの経済格差に根ざす「部族紛争」であるとする思想が綱領にも盛り込まれ、1924年2月に非合法化されるまでこの新党は「右派」の影響下におかれることになった⁸³⁾。

ところが、ユーゴスラヴィア共産党そのものは、1923年5月のウィーンでの第2回全国協議会で「左派」の指導下におかれることになり、カツレロヴィチが書記長に選ばれた⁸⁴⁾。この変化を促した要因として、その直前にコミンテルン執行委員会がユーゴスラヴィアの党に書簡を送り、民族問題についてその立場を批判し、「ユーゴスラヴィア国家からの実際の分離にさえいたるまでの絶対的な民族自治権」を支持するように要求した点を挙げる文献もある⁸⁵⁾が、この書簡は確認できない。いずれにせよ、ブルガリアの党を中心

81) *International Press Correspondence*, Vol. 3, No. 2 (1923 Jan. 18), pp. 100-101. (稿者の参照したものは、主としてベルリンないしはウィーンで刊行された『インプレコール』の英語版のマイクロ・コピーである。それについては以下 *Inprecorr*, また補足的に参照した独語版は *Inprekorr* として引用する)。

82) *The Communist International*, Ser. I, No. 28 (1923), pp. 109-110.

83) Avakumović, *op. cit.*, pp. 65-66; Shoup, *op. cit.*, p. 23 n.; *Преглед историје СКЈ*, стр. 112-116.

84) Avakumović, *op. cit.*, pp. 66-67; *Преглед историје СКЈ*, стр. 102-104.

85) Shoup, *op. cit.*, p. 23 n. 当時のコミンテルン史料には、バルカンについてはまだここに掲げたような形の民族自決要求は出ていないようである。また別の文献では、同党第2回協議会に出席したコミンテルン代表は「右派」の立場を支持したとされ (Avakumović, *op. cit.*, p. 66), この点にか

にバルカン対策を具体化しはじめたコミンテルンが、同年春にユーゴスラヴィアの民族問題にたいして発言をはじめたことは疑いない。コミンテルン機構は第4回大会でふたたび改組され、執行委員会のなかに小局に代わって幹部会が置かれ、4カ月ごとに拡大執行委員会が開かれることになったが、1923年6月に開かれたその第2回会議においてジノヴィエフは、ユーゴスラヴィアの党は民族問題の重要性を理解していないと批判した。それにたいしてユーゴスラヴィア代表は、「同志ジノヴィエフの非難は不当である。ユーゴスラヴィアの党はセルビアのヘゲモニーと、またスロヴェニアおよびクロアチアのブルジョアジーのショーヴィニズムの両方にたいして頑強に闘っている。……われわれが民族抑圧に反対する闘争にこれまで参加できなかったのは、われわれの民族問題にたいする態度が誤っていたからではなく、われわれが非合法の位置におかれてきたからである」と反論した⁸⁶⁾。こうした外からの衝撃も加わり、この年には党内で民族問題にかんする議論が沸騰した。「右派」のなかでも、ミロイコヴィチらは前述したように依然として単一民族論の立場をとっていたが、同派の指導者マルコヴィチはその立場をいくらか変えた。獄中にあったマルコヴィチの書いた2冊の本『憲法問題と労働者階級』『マルクス主義からみた民族問題』が同年中に刊行されたが、彼はそのなかで、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人は3つの別の民族であるとした。他方彼は、1913年のスターリン論文を援用して、民族間の紛争はブルジョアジー同志の争いであり、それに巻き込まれれば階級闘争は死産に終わるであろう、と述べた。また彼は、中央集権主義には反対だが、ユーゴスラヴィアを「連邦化」する要求はプロレタリアートの立場からは支持できない、民族問題は結局「憲法上の問題」であり、民主的基盤のうえに立ったクロアチア、スロヴェニアの自治こそ必要だ、と主張した。それにたいして「左派」の立場も民族問題については多様であったが、民族問題は憲法問題ではない、クロアチア、スロヴェニアの農民をブルジョアジーの影響から切り離し、そのセルビア・ヘゲモニー主義にたいする闘争を支持し、各地で労農政府を樹立してユーゴスラヴィアを「連邦国家」にすべきだ、という主張では大部分が共通していた⁸⁷⁾。

後述するように、1923年6月のコミンテルン拡大執行委員会は、そのバルカン政策を形成するうえでひとつの重要な転機となった。同年12月に第4(6)回バルカン共産主義連邦会議が開かれたが、ユーゴスラヴィアについては、民族問題と農業問題にかんする2つの決議を採択した。前者は、「被抑圧民族の解放闘争は必然的に帝国主義的諸条約にたいする闘争になる。」「セルビアのブルジョアジーと王室は、(クロアチア、スロヴェニア等の)他のすべての民族にたいして野蛮な支配を押しつけている。」「この支配と抑圧政策に反対して、すべての被抑圧民族の抵抗がより強力に行われるようになった。……しかし、クロアチアとスロヴェニアのブルジョアジーは、政治的、経済的譲歩と引き換えに……セルビアの支配を認めている。」「セルビア支配に反対し、最終的決定をも含む自決権を強める闘いを支持することが、革命的プロレタリアートの利益であり、義務である」な

んする真相は明らかではない。

86) *Inprecorr*, Vol. 3, No. 45 (1923, Jun. 22), pp. 439, 445.

87) Avakumović, *op. cit.*, pp. 67-69; Shoup, *op. cit.*, pp. 24-25; *Преглед историје СКЈ*, стр. 122-124.

どとし、共産党に「諸民族の自決権をその全体において支持する」こと、憲法破棄のため闘うことを求める、というものであった⁸⁸⁾。ユーゴスラヴィア共産党は、翌24年1月の第3回全国協議会で、「分離を[・]含[・]み[・]う[・]る[・]民族自決権」(傍点引用者)、「ユーゴスラヴィア連邦労農共和国の設立」などのスローガンを初めて採用する⁸⁹⁾ことによって、この方針に順応していこうとするが、しかしその後の過程でさらに厳しい批判をコミンテルンから浴びることになる。

ルーマニアの党にたいしてコミンテルンがすでに1920年暮から厳しい批判を行ったことは、前述した通りである。1922年10月の第2回党大会で中央委員が選ばれたが、その構成はほとんどが旧王国の若いインテリ・グループと少数民族出身者であった⁹⁰⁾。国際舞台で社会民主党左派として活躍した経歴をもつコンスタンティネスク (Alexandru Constantinescu) が書記長に選ばれたが、数カ月後に彼が逮捕され、後任にはクリステスク (Gh. Cristescu) という人物が選ばれた。彼が非合法活動や民族自決権要求については不明瞭な態度しか示さなかったこと⁹¹⁾、またそうした人物が指導者に選ばれたことは、当時の党勢の弱さと、党のコミンテルンとのつながりの細さを示していた。当時ルーマニアの党がどのような民族政策を展開していたかは不明である。同国の現在の歴史論文では、「民族の独立と主権、国家の一体性の擁護という問題は、ルーマニア共産党の創設以来の全活動にとって至上命令をなしてきた⁹²⁾」とする評価が行われているが、バルカン共産主義連邦はすでにルーマニアにおける少数民族の権利擁護の闘いをこの党に強く義務づけており、また1922年11月のコミンテルン第4回大会においてジノヴィエフが、パウケル (Marcel Pauker) らルーマニア代表団の労をねぎらい、「ルーマニアの同志たちはあらゆる迫害のもとでその義務を忠実に遵守してきた⁹³⁾」と繰り返し述べていることをみても、この党が「国家の一体性の擁護」を至上命令としていたとは思われない。1923年6月のコミンテルン拡大執行委員会において、前述したようにコミンテルンはバルカン民族問題に重大な関心を示したが、そのころからコミンテルンの機関誌紙には、ルーマニアにおける民族抑圧にかんする記事が多くなった。たとえば、同年7月の『インプレコール』紙上で、ルーマニアのバドゥレスク (A. Badulescu, 本名コブロシュ Koblos Elek というハンガリー人) は、「ルーマニアにおける民族問題」という論文において、ベッサラビアにおけるロシア人、トランシルヴァニアにおけるハンガリー人やドイツ人がいかに迫害されているかを詳論したのち、「ルーマニア共産党はつねに少数民族の権利のための真の闘争を行っており、また被抑圧民族の解放はプロレタリアートの勝利によってのみ達成されるという点を主張している」とし、「これからの諸民族は、社会主義連邦バルカン・ソヴェト共和国を通じてのみ完全な民族の自由を獲得しうる」と述べている⁹⁴⁾。ただ、こうした論理は、この年には民族自決権要求を前面に押し出しはじめたコミンテルンやバルカン共

88) *Inprecorr*, Vol. 4, No. 31 (1924, May 29), pp. 312-314.

89) Avakumović, *op. cit.*, pp. 69-72; *Преглед историје СКЈ*, стр. 122-128.

90) その構成については, cf. Ionescu, *op. cit.*, p. 20.

91) *Ibid.*, p. 21.

92) C. Ilie, *op. cit.*, p. 28.

93) *Protokoll, IV. Kongress*, S. 50.

94) *Inprecorr*, Vol. 3, No. 51 (30) (1923, Jul. 19), pp. 531-532.

産主義連邦との関係では、問題をはらむものであった。またこの論文は、ルーマニアの人口の3分の1が外国人だとしながら、たとえばトランシルヴァニアでは人口の57.5パーセントがルーマニア人であり、ベッサラビアではルーマニア人が1,688,000人で他の民族が954,000人である、というような統計を引用している点も注目される⁹⁵⁾。

1923年12月にベルリンで開かれた第4(6)回バルカン共産主義連邦会議では、ルーマニア政府がソ連と敵対する「協商国の自発的な配下」になったことがとくに強く主張され、民族問題にかんする共産党の任務として、「ルーマニア・ブルジョアジーの権力にたいする諸民族の闘争がルーマニア人プロレタリアート自身の解放闘争を強化すること、またそれが革命の最終的勝利とルーマニアの真の独立にとって第一義的な重要性をもつこと」がらであること、現在国家機構からの完全な分離を含む民族自決権の原則をめざすさまざまな民族の労働者、農民の努力が可能なあらゆる手段によって強化されるべきであること、をルーマニアの勤労人民に示す」ことが掲げられるにいたった⁹⁶⁾。翌年ルーマニアの党代表はコミンテルン大会で、「わが党は長年にわたり民族問題を軽視してきたが、第6回バルカン会議が民族問題にかんする明確なプログラムをわれわれに与えてくれた⁹⁷⁾」と述べており、このバルカン連邦会議をきっかけとして、ルーマニアの党はコミンテルンやブルガリアの党からの強力な圧力にさらされることになった。1924年3月に外交舞台に登場したベッサラビア問題をめぐるソ連とルーマニアの激しい対立は、こうした圧力をさらに加重させる原因となるのである⁹⁸⁾。

1920年4月に発足したギリシア共産党は、ルーマニアの党以上に弱体であり、党中央には「主としてインテリゲンチヤから成る完全に雑多な分子⁹⁹⁾」が選ばれ、しかもその多くが投獄されていたため、その機能がほとんど麻痺していた。同年7月—8月に開かれたコミンテルン第2回大会で厳しい加入条件が決められたが、それをめぐってこの小さな党のなかで対立が表面化した。1922年2月に党会議が開かれ、いわゆる「2月テーゼ」が採択されたが、それは前年6月—7月のコミンテルン第3回大会で攻撃から防御への戦術転換がなされ、「大衆のなかへ」という方針が採用されたことを理由に、「党は議会のあらゆる活動に可能なかぎり広く参加」すべきだ、とする「合法主義」の立場を示していた¹⁰⁰⁾。こ

95) *Ibid.*, p. 531. この記述は、すくなくともこの2地方についてはルーマニア人が過半数を占めることを示している。コミンテルンもこの論文を掲載することによって、その点を間接的に認めたといえよう。なお、1940年にソ連がベッサラビア、北ブコヴィナの割譲を現実にルーマニアに要求したころになると、「ベッサラビアはウクライナ人の土地である。その国民の過半数はウクライナ民族と同じ血縁のものである。1897年の調査によれば、この地方の人口の76パーセントがウクライナ人、モルダヴィア人、ロシア人であり、12パーセントがユダヤ人、5パーセントがブルガリア人であった」(*The Communist International*, Vol. 17, No. 7, Jul. 1940, p. 465)ということがいわれるようになった。この点は、当時のソ連がその領土要求の根拠を、住民の階級構成でなく民族構成におくようになったために、帝政ロシア時代の人口調査資料の「ルーマニア人」を「モルダヴィア人」と読み替えざるをえなくなったことを示している。

96) *Inprecorr*, Vol. 4, No. 27 (1924, May 1), pp. 261-262.

97) *Ibid.*, Vol. 4, No. 51 (1924, Jul. 26), p. 526.

98) 邦文文献としては、平井友義「両大戦間のソ連ルーマニア関係におけるベッサラビア問題」『アジア経済』第15巻第1号(1974年1月15日)、参照。

99) *Inprecorr*, Vol. 3, No. 31 (1923, Apr. 5), p. 252.

100) Kousoulas, *op. cit.*, pp. 8-9.

うしたギリシアの党の独自の態度は、民族問題についても示された。コミンテルン第3回大会に出席したゲオルギアデスが、マケドニア自治要求を支持せよというコラロフの要請にたいし明確な態度表明を避けたことは前述したが、1922年5月のバルカン共産主義連邦の執行局の会議でも、コラロフは同じ問題について立場の明示を求めた。それにたいしてギリシア代表ペツォプーロス (Yiannis Petsopoulos) は、「他 (ブルガリア以外) のバルカン諸国の共産党は、1913年の敗北以来ブルガリアのブルジョア政府が宣伝しているスローガンを採用することはできない。ことにブルガリア政府に支援され、装備を与えられた数百の IMRO のテロ団がギリシアとセルビア領のマケドニアで活動している以上、なおさらである」として反対の見解を述べたといわれる¹⁰¹⁾。

1921年から翌年にかけて、ギリシア共産党は同国の国際関係の激動に巻き込まれることになった。ギリシアは1919年にアナトリア半島西端のスマイルナ (イズミール) を占領し、翌年8月のセーヴル条約によってその領有を認められたが、そのすこしまえにトルコでケマル革命が発生した。帝制を覆したケマル政権は、セーヴル条約を否認し、1921年3月にはソ連とも友好条約を結んでギリシアに反抗する姿勢を明らかにした。ギリシアの国王政権は3月末に新たなスマイルナ出兵を行い、その背後地へ攻撃を仕掛けたが、トルコ軍の反攻と農民の敵意に阻まれ、8月から9月にかけて完全に敗北した。1922年11月20日からローザンヌでトルコにかんする新しい講和会議が開かれたが、それにさきだってギリシア・トルコ間に住民移送協定を結ぶ交渉が開始された。この交渉は結局翌23年1月30日の協定を生み出すが、その結果ギリシア領のバルカン諸地域から40万人以上のトルコ人が、またスマイルナや他のトルコ領各地から130万人にのぼるギリシア人がそれぞれその民族の母国へ強制移送されることとなった¹⁰²⁾。ローザンヌ講和交渉の始まる時期に開かれていたコミンテルン第4回大会では、この住民移送問題が大きく取り上げられ、ギリシア共産党には住民移送に反対する任務が与えられた¹⁰³⁾。スマイルナ派兵に一貫して反対してきたギリシア共産党は、敗北後の政治危機と、アナトリア戦線からの敗走ギリシア兵のなかの左翼的気運に影響されてしだいに急進化し、1922年10月の特別党大会では前述したペツォプーロスを「社会愛国主義者」として除名した¹⁰⁴⁾が、他方同じ大会で、コミンテルンの決定は義務的なものであるが、それは「地方的条件と党の政策にしたがって」解釈され、適用される、とする決議を行った¹⁰⁵⁾。また、コミンテルン第4回大会の方針についてもギリシア共産党は、住民移送反対という政策はユートピア的で、避難民を混乱させ、政府に党弾圧の口実を与えるという理由で批判的な態度を示した¹⁰⁶⁾。前述したように、このコミンテルン大会の直後に開かれた第3(5)回バルカン共産主義連邦会議では、ブルガリアの党のイニシアティヴのもとに、マケドニア、トラキアの自治と独立の擁護という路線が打ち出されたが、ギリシアの党はこの会議へ代表を送らず、その点についてまたも態度を明確にしなかった。翌1923年3月に2人のブルガリアの党指導者がギリシア

101) *Ibid.*, pp. 54-55.

102) Stavrianos, *The Balkans since 1453*, pp. 590-591.

103) *Protokoll, IV. Kongress*, SS. 573-582.

104) *Inprecorr*, Vol. 3, No. 31 (1923, Apr. 5), p. 252.

105) Kousoulas. *op. cit.*, pp. 10-11.

106) Rothschild, *op. cit.*, pp. 234-235.

へ送られ、ギリシア党内の右派的傾向を厳しく批判し、その結果同年5月の党全国会議ではじめて「少数民族の自決権支持」というスローガンが採択された¹⁰⁷⁾。

同年6月のコミンテルン拡大執行委員会を経て、コミンテルンのバルカン民族問題にかんする態度はより強硬かつ具体的なものになった。12月の第4(6)回バルカン共産主義連邦会議は、その第1決議「マケドニア、およびトラキアの将来」において、「マケドニア、トラキアの被抑圧民族の民族的、文化的権利と独立のために、最大限の精力をもって行動することはバルカンの全共産党の義務である」とし、またその第4決議「ギリシアにおける少数民族の問題」において、ギリシアでのトルコ人、ブルガリア人にたいする迫害や住民移送を強く非難するとともに、「共産党は少数民族の政治的、文化的自由のために闘わなければならない。それは、少数民族が自決権を持つと宣言しなければならない。この自決権は、まとまった少数民族にギリシアから分離する権利さえ与えるものでなければならない」と述べた¹⁰⁸⁾。1924年2月のギリシアの党全国会議では、党からあらゆる「日和見主義分子」を追放することが決定され¹⁰⁹⁾、その後この党もコミンテルンによる厳しい批判にさらされることになる。

ところで、1923年にコミンテルンのバルカン政策がある意味で転換をとげた一つの原因は、この年に発生したブルガリアの事件に求められるであろう。ブルガリアの右翼勢力および国王側近の軍部は、スタンボリースキ政権の権力基盤が強化されたのをみて、IMROと提携し、1923年6月8日にクーデタを起こし、右翼的なツァンコフ政権を樹立した。スタンボリースキを「バルカンのムッソリーニ¹¹⁰⁾」とみなしていた共産党は、このクーデタを都市と農村のブルジョア階級同士の争いであると評価し、それにたいして中立の態度をとった。北部ブルガリアで共産党組織が農民とともに自発的な武装蜂起を起こしたのにたいして、党中央は中止命令を出した。コミンテルンでは、すでにみたようにブルガリアの党指導部の役割が大きくなっており、1922年12月にはコロロフがその執行委員会書記長に就任していたほどであったが、それだけにこのブルガリアの事件はコミンテルンに重大な衝撃を与えた。6月23日から開かれたコミンテルン拡大執行委員会においてラデクは、この事件について、「いかなる共産党もかつて経験したことの無いもっとも重大な敗北」であり、イタリアと違ってブルガリアでは共産党が最大、最強の大衆政党だから、事態はイタリアのファシストの勝利の場合よりもっと悪い」と述べ、「もっと悲しむべきことは、ブルガリアの党がその敗北とその原因を認めていないことだ」として、強くブルガリアの党を批判した。さらに続けて彼は、「さらに、これまで言わなかったが、全政治状況における非常に重要な政治的要素がある」として、IMROをとりあげ、それが「社会的には小貧農により構成されて」おり、「われわれがスタンボリースキに反対して同盟を結びえた社会的要素」であった、と述べ、「党はそれを実行してこなかったばかりでなく、もっと特徴的なことは、マケドニア問題が彼らの現状分析においてまったく考

107) *Ibid.*, p. 235; Kousoulas, *op. cit.*, pp. 55-56.

108) *Inprecorr*, Vol. 4, No. 24 (1924, Apr. 10), pp. 224-226; *Ibid.*, Vol. 4, No. 27 (1924, May 1), pp. 260-261.

109) Kousoulas, *op. cit.*, pp. 13-14.

110) *Inprecorr*, Vol. 3, No. 43 (1923, Jun. 14), p. 414. それはコミンテルン自身による評価でもあった。

慮されていないことである」として、カバクチェフ個人にも非難を向けた¹¹¹⁾。ジノヴィエフは、ブルガリアの党が中立的な態度をとったことを批判し、「同志カバクチェフ」は「ソフィアの大衆は旧政府の崩壊を救いと明らかな満足の気持で受け取った」とさえ言った、と非難した¹¹²⁾。拡大執行委員会は特別声明を発表し、「マケドニア人民よ、反革命クーデタに利用されるな。労働者農民政府のみがマケドニア人民を解放しうるのだ」と訴えた¹¹³⁾。コミンテルンから厳しく批判され、またツァンコフ政権による弾圧強化に直面したブルガリア共産党は、8月初めに武装蜂起によってツァンコフ政権を倒し、「労働者農民政府」を樹立する計画を決定し、農民同盟や IMRO に政治的提携を申し入れたが、無視された。そこで党は、9月22日に単独で武装蜂起を決行したが、27日までに完全に鎮圧され、数百人が殺害ないし処刑され、党そのものも非合法化された。この二重の失敗について、ジノヴィエフは、9月蜂起の失敗は6月の誤謬の結果であるとし、戦いはこれからである、と述べた¹¹⁴⁾。他方、ブルガリアの党指導者は、反批判に乗り出した。カバクチェフはコミンテルン機関誌において、「同志ラデクの発言は絶対に間違っている」とし、ブルガリアの党は数年にわたりマケドニア、ドブルジアの人民のあいだで、「兄弟」「難民連盟」などの組織を作り、「解放」という新聞を発行するなど、強力な活動を行ってきた、と述べるとともに、しかし IMRO の頂点にはブルガリアの国王やブルジョアジーの忠実な助手が立っており、党は彼らには反対する、ただし、民族解放闘争そのものは支援する、「そればかりではない、党はマケドニア、トラキア、ドブルジアの……被抑圧民族を解放する革命闘争を支持するものなら、この運動 (IMRO) の指導者とも了解に達しようとしている」と述べた¹¹⁵⁾。また、コロロフも「ブルガリア共産党の戦略」と題する論文のなかで、いくつかの点で自己批判を行うと同時に、「マケドニア問題には二つの側面がある。第一に、それはマケドニア人大衆の自由と独立の運動である。……第二には、それはいくつかのバルカン諸国の資本主義ブルジョアジーの、民族統一という装いのもとにマケドニアを征服しようとする野望を示す。第一の場合、それは民族革命運動であり、第二の場合には民族の征服である」とし、さらに、党は IMRO に同情的であったが、最近その指導部にはブルガリア・ブルジョアジーの影響が感じられる、党の役割はマケドニア人大衆の革命闘争を支持すると同時に、マケドニア組織をブルガリア・ブルジョアジーの道具にしようとする試みと闘うことである、とその立場を展開した¹¹⁶⁾。

この二つのクーデタをめぐるコミンテルン内部の論争が、ブルガリアの党指導者を含めたコミンテルン中枢部のバルカン政策にひとつの転機を作ったことは疑いない。1923年12月の第4(6)回バルカン共産主義連邦会議は、前述したように、バルカンの民族要求一般にたいして好意的な評価を打ち出すとともに、「分離を含む民族自決権」の主張を具体的なバルカン諸国のそれぞれの地域について展開するのである。そして、コミンテルン

111) *The Communist International*, Ser. I, No. 26-27 (1923), pp. 92-95.

112) *Inprecorr*, Vol. 3, No. 48 (28) (1923, Jul. 5), p. 483.

113) *Ibid.*

114) *The Communist International*, No. 28 (1923), pp. 65-68.

115) *Ibid.*, pp. 109-117.

116) *Ibid.*, Vol. 30 (1924), pp. 30-32. マケドニア情勢にかんする同様な分析と評価については、cf. *Inprecorr*, Vol. 3, No. 68 (1923, Oct. 27), pp. 773-777.

内での地位を復権されたコラロフ，カバクチェフらのブルガリア党指導者が中心になって，コミンテルン第5回大会におけるバルカン問題定式化の準備が進められていくのである。

〔附記〕 本稿は文部省科学研究費による研究成果の一部である。

The Communist International and the National Questions in the Balkans

Shigeru KIDO

This paper aims to give a brief and rough sketch of the themes as follows: what policy had the Communist International, with its banner of internationalism, adopted on the national questions in the Balkans, where serious difficulties of the Versailles System about the national problems were concentrated; how and why had it been changed; through what process did develop the mutual relations between the Comintern and the communist movements in the Balkans? However, the aim is restricted to a search for the facts appeared in several documentary sources, and it is far beyond the scope of this paper to present a total analysis of the development of Comintern itself, or of the interaction between the communist movements and the political situation in that period.

It seems necessary for such a study to make, first of all, a general survey of the Bolsheviks', above all Lenin's view on the national problems. Generalization may be misleading, as their view was indeed flexible, depending upon situations and subjects. But such tendencies, as a whole, could be discernible that they stood firmly for emancipation of the oppressed nations and for full equality of nations, and that, at the same time, they did not claim these points as a general and all-embracing principle. The nucleus of their arguments, it seems, was that a demand for national self-determination could be meaningful only as a right to resist against oppression, and could not by itself be a part of the positive program for the socialists in *oppressed* nations, and that, in other words, national self-determination could be important only as an indispensable condition for rapprochement and fusion of nations, but not as a step for their division and fractionization.

The left socialists of the Balkan countries at the time of the foundation of Comintern had, with all their varieties and inconsistencies, closely approximate stand on the national questions: they fought against national oppression, but were against every trend of nationalism. That was why they insisted, not merely as a propaganda device but as a practical goal, on the establishment of a Socialist Balkan Federation, in order to overcome damned national rivalries of the past Balkans. The communists of the South-Slav state, for example, maintained at first that the South-Slavs belonged to one nation, that nationalism was a demand by the bourgeoisie, and that focusing on

national issues would tend to distract revolutionary forces from the class struggle. These points were afterwards severely criticized as a stand of national nihilism, but we have to take into consideration the fact that they were products of the revolutionary international situation in those days, as well as of the strong reaction against the past Balkan nationalism. The Comintern itself had not criticized the Communist Party of the South-Slav state on its national policy until 1922.

The first Congress of the Comintern in 1919 and the second one in 1920 were held under the circumstances of revolutionary upsurge in Europe. Because of this, people paid little attention to the national questions in the Balkans. At the second Congress Lenin presented in the draft of Some Theses on the National and Colonial Question, several important lines on the national problems, of which the most salient point was that he criticized the abstract or formal raising of the question of national equality as being inherent in bourgeois democracy by its very nature, and emphasized a preference on the class struggle as a prerequisite to the realization of national equality. The third Congress of the Comintern in 1921, influenced by the discouraging prospect of world revolution and by the changed tone of Soviet policy at home and abroad, turned its attention to the search for available *allies* in respective regional conditions, with a slogan: "Into the masses." From about that time on, the Comintern's concern in the Balkan situation gradually turned more concrete, but, so far as the national questions are concerned, its stand remained basically unchanged: it was against every aspect of national oppression; at the same time it asserted that nothing but a Balkan Socialist Federation could fundamentally solve the national problems.

Since around 1923 the Comintern began to criticize concretely various policies and activities of each communist party in the Balkans, and to instruct them to support the thesis of national self-determination *up to separation* on individual national question in that area. At the enlarged session of the Executive Committee of Comintern in June of 1923, and at the sixth Conference of the Balkan Communist Federation in December of the same year, the communist parties of the Balkan countries were told that it was their unmistakable duty to defend the right of every region with national troubles to separate itself from the existing state. What were the main factors which brought about such a change of attitude? Among others, including above-mentioned general motive of searching for allies under the new international circumstances, the strong impact of the June coup-d'état in Bulgaria on the leadership of the Comintern must be counted, too. This paper tries to make clear the relations between the Comintern and individual communist parties in the Balkan countries. The full scope of Comintern's policy on the national questions in the Balkans appeared at its fifth Congress in 1924, an analysis of which will be attempted at Part II.